

研究紀要

— 専修学校教員研究奨励事業 —

平成27年度

一般財団法人 職業教育・キャリア教育財団

研究紀要第36号に寄せて

一般財団法人 職業教育・キャリア教育財団
理事長 福田 益 和

一般財団法人職業教育・キャリア教育財団では、専修学校における研究・研修活動を推進・奨励し、広く専修学校教育の質的向上、内容充実に資することを目的として、文部科学省から補助を得て教員研究・研修事業を実施しております。

毎年、各分野から応募が寄せられておりますが、研究研修事業中央委員会での審査の結果、今年度は研究奨励事業1件を対象とし、その成果を研究紀要第36号としてここに刊行する運びとなりました。

これらの研究成果は、各学校の教育内容の充実にとってはもちろん、社会的、学術的にも重要であり、広く専修学校教育に従事しておられる教員の方々の参考になるものと考えております。

専修学校は従来の教育実績を踏まえ、社会人に対しても高度な職業教育を提供できる機関として、その役割が大変期待されており、今後とも、教育内容を一層充実させ、その振興を図る必要があります。

これからも優れた研究の成果が本財団に寄せられ、専修学校教育の質が充実、向上し、発展していくことを期待しております。

平成28年3月

専修学校教員研究奨励事業

卒業生の初期キャリア形成と教育プロセスとの関係

～ 専門学校 IR 卒業生調査による教育改善 ～

古賀 稔邦（日本電子専門学校）

目 次

はじめに	9
1 章 専修学校評価の背景と研究のねらい	10
2 章 調査概要と分析対象校	12
2. 1 調査概要	12
2. 2 卒業生調査回答状況	15
3 章 初期キャリア形成状況	16
3. 1 回答全体の集計	17
(1) 現在の就業状況	17
(2) 専門学校卒業生の職場における待遇と職場に対する評価	19
(3) 仕事に必要な能力の必要性と獲得状況	22
3. 2 卒業年コーホート別集計	25
(1) 就業状況の経年変化	25
(2) 四大卒と比較した評価の経年変化	27
(3) 仕事に求められる能力の必要性とその獲得状況の経年変化	28
4 章 在学期間中の教育について	33
4. 1 学校が提供した教育に関する充実度	33
4. 2 在学期間中熱心に取り組んだ事柄	36
5 章 専門学校教育の有用性（学習成果）と満足度	38
5. 1 専門学校教育の有用性と満足度の集計結果	39
5. 2 専門学校教育の有用性に関する経年変化	41
5. 3 満足度の経年変化	43
6 章 初期キャリアと教育プロセスとの関係	44
6. 1 学校側が提供した教育の充実度と満足度・有用性との関係	45
6. 2 在学期間中熱心に取り組んだ事柄と満足度・有用性との関係	49
6. 3 満足度の規定因子	54
7 章 A 専門学校の教育改善に向けて	57
7. 1 A 専門学校の課題	58
(1) 教育課程の課題	58
(2) 教育課程以外の課題	58
(3) 卒業後の課題	59
(4) 3 専門学校に共通した課題	59
7. 2 A 専門学校の教育改善に向けて	60
(1) 教育課程の課題の改善の方向性	60
(2) 教育課程以外の課題の改善の方向性	60
(3) 卒業後の課題の改善の方向性と 3 専門学校に共通した課題について	61
謝辞	62
引用・参考文献	63

卒業生の初期キャリア形成と教育プロセスとの関係

～ 専門学校 IR 卒業生調査による教育改善 ～

古賀 稔邦（日本電子専門学校）

はじめに

本研究は、インスティテューショナル・リサーチ（institutional research、以下 IR）活動の一環として、工業（情報・グラフィックデザイン・コンテンツ）分野の3つの専門学校の卒業生調査を行い、教育改善に活かすことを目的としている。

卒業生調査により教育の改善を図る場合、卒業生の現在の状況と在学期間中の教育プロセスとの関係を明らかにすることが重要である。本研究では、3専門学校の卒業生の「就業状況」、初期キャリアを築く上での「専門学校教育の有用性（学習成果）」、就業経験を経た上での在学期間中の「教育プロセスに対する評価」等に関する調査を行った。調査データより各専門学校の課題を顕在化させると共に、初期キャリア形成と教育プロセスとの関係を分析し、教育改善の方向性を示す。

1章では、専修学校の学校評価に関する現状や『専修学校における学校評価ガイドライン』に示されている卒業生調査の意義について記述する。これらの背景を受けて、卒業生調査を実施し、教育の改善を図るといった研究のねらいを示す。

2章では、卒業生調査対象校の概要や調査の実施方法について示す。今回の卒業生調査は、2012年「高等教育と学位資格研究会」（研究代表吉本圭一、以下 EQ 研）が行った卒業生調査と同じモデルに沿った調査の枠組みと調査項目を、EQ 研の承認を得て活用した。調査対象は、3つの専門学校の卒業後1年目、5年目、9年目の3コーホートである。無償のクラウドサービスを活用した Web 調査システムの概要や、それを使って2015年7月～9月に掛けて行った調査の回答状況について示す。

3章では、卒業生の初期キャリアの状況をまとめた。「就業形態」「従業員数」「年収」などといった項目から「学歴に相応しい処遇」「職場に対する満足度」などの卒業生が個々に判断する項目、「現在の仕事に求められる能力とその獲得状況」など、多岐にわたり調査した。各専門学校の集計と経年変化として卒業年毎の集計を示す。

4章では、在学期間中の教育プロセスに関する調査をまとめた。在学期間中の各種授業や就職支援など、学校が提供した教育についての充実度を調査した。また、在学期間中に熱心に取り組んだことについて、各種授業や部活・サークル活動などに加えて「友人との交流」「授業外での教員との交流」「アルバイト」などについて調査した結果を示す。

5章では、初期キャリアを築く上での「専門学校教育の有用性」と「総合的に振り返った自校に対する満足度」に関する調査結果を示す。有用性の項目として、「一人前に仕

事を行うための能力を身につける上で」「将来のキャリアを展望する上で」などといった6項目である。それらについて、経年変化も示す。

6章では、本稿のタイトルにもなっている4章の調査結果（教育プロセス）と5章の調査結果（初期キャリア）との関係性を示す。初期キャリアを形成する上での専門学校教育の有用性が、在学期間中に提供された教育や熱心に取り組んだことなどの何によって形成されるのかを、多変量解析によりその規定因子を見出す。

また、総合的に振返った自校に対する満足度について、分析の対象範囲を教育プロセスから広げて、専門学校への入学から在学期間中（教育プロセス）を経て現在に至るまでを通して、その間の何によって規定されるのかについて分析を行う。

7章では、3章から6章までの調査結果により顕在化した課題に対して、初期キャリアと教育プロセスとの関係性の分析結果などから得られた知見を活かし、その改善の方向性を述べる。

1章 専修学校評価の背景と研究のねらい

専門学校は、2014年度より新たに設けられた職業実践専門課程の認定要件である学校関係者評価の実施により、自己評価や外部評価に関する関心が高まっている。文部科学省でも『専修学校における学校評価ガイドライン』（2013）や『学校評価を活かした専修学校の質保証・向上に向けて～専修学校における学校評価実践の手引き～』（2015）を発行するなど、専門学校における学校評価の普及を促している。

現在、高等教育段階における「質の保証」とは、第三者評価の実施によって図られるといった考え方が国内外において一般的である。2014年度行われた「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議」の審議まとめにおいて、専門学校は「、、（前略）第三者評価が制度化されておらず、その柔軟な制度的特徴から、教育の質が必ずしも保証されたものとはなっていない。」と指摘されている。こうした背景もあって、2015年度専修学校関係委託事業「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」では、11分野にわたり第三者評価システム構築に関する事業が行われている。

学校関係者評価にしても第三者評価にしても、その基本は自己評価である。2007年度から専門学校も自己評価とその公開が義務化されているが、『私立高等学校等実態調査』によると、平成26年5月1日現在「自己評価の実施：69.8%」「その公表：35.6%」とその実施・公表の割合は低い。自己評価から学校関係者評価へ、更には第三者評価の実施へと、急ピッチにより厳格な評価への取組みが進んでいるが、そうした制度的な検討と並行して、各専門学校では教育の質の保証に向けて、義務化されている自己評価に真摯に取り組むべきである。

『専修学校における学校評価ガイドライン』（2013）では自己評価の実施にあたり、

卒業生調査の活用を以下のような観点で促している。

- ・専修学校の卒業生のキャリア形成の効果把握等を通じ、学校から職業生活への移行後も見据えた教育指導等に係る評価の結果を活用し、自校の学校運営の改善につなげること。
- ・各学校においては、卒業生に対する調査（就業・キャリアアップ等の状況、満足度、学校に対する要望、職場で求められる能力等）を通じて、例えば、関係業界で求められている最新の知識・技術・技能のカリキュラムへの反映・改善、教員の資質向上に向けた研修、人事交流等の取組や、それらの取組促進に向けた効果的な組織マネジメント、就職支援等へ積極的に活用すること。
- ・卒業後のキャリア形成への効果把握（入学から在学中の能力育成、学習行動などのプロセス評価、卒後評価まで）と卒業生等の評価を踏まえた教育課程の編成・改善など。
- ・複数の学校間の連携によるベンチマーク（目安となる指標例など）を活用した評価を通じた教育活動の改善（各学校の機能や特色の明確化、成果や課題の共有など）。
- ・学校間での相互評価など効果的な評価を通じた教育活動の改善。

『専修学校における学校評価ガイドライン』（2013）の抜粋

専門学校生は、卒業後多くが在学中に学んだことが活かせる業界への就職を果たしている。このため、他の高等教育機関と比較して、卒業生の業界における初期キャリアの状況やそこで求められている能力の把握が、教育改善には特に重要である。

また、単独の専門学校による卒業生の状況の把握のみならず、同分野の複数の専門学校が連携して調査を行い、ベンチマークとなる標準的な指標を設定し、その指標との比較による評価と改善を図るといったことが、先のガイドラインからも求められている。そうした活動が卒業生調査による IR 活動であろう。

本稿では、工業（情報・グラフィックデザイン・コンテンツ）分野 3 校の専門学校（以下 A 専門学校、B 専門学校、C 専門学校）の卒業生調査を行い、その集計・分析結果をもとに、IR 活動の一環として主に A 専門学校の教育改善に活かすことを目的としている。

本研究のモデルは、2012 年に「高等教育と学位資格研究会」（研究代表吉本圭一、以下 EQ 研）が行った卒業生調査である。今回の卒業生調査でも、同じモデルに沿った調査の枠組みと調査項目を、EQ 研吉本研究代表からの承認を得て活用させて頂いた。調査の実施にあたっては、卒業生に対して Web 調査システム上に、EQ 研卒業生調査

の枠組みと調査項目を活用していることを明記している。

今回の調査対象校である 3 校の内、A 専門学校および B 専門学校は、2012 年 EQ 研によって行われた卒業生調査にも参加している。同じ調査項目にすることにより、そこで得られた結果との比較・検討を行うことが可能となった。

高等教育機関の学習成果は、卒業時点における学習内容の習得度によって評価するより、卒業後数年経過した時点で卒業生がどのような初期キャリアを形成し、学習内容を活かしてどのような活躍をしているかによって評価することが本質的である。特に職業教育機関であれば、卒業生の職場における活躍の状況によって評価することが最も適切な評価といえよう。また、在学時の教育プロセスの各種の取組みの内、どの項目が卒業後の就業状況に影響を与えるものかといったことを明らかにすることが、教育改善を図るには重要である。

本稿では、卒業生調査により得られたデータから、先ず単純集計により卒業生の初期キャリアの状況を把握した。その後、就業経験を踏まえた上での自校に対する「満足度」や専門学校教育の「有用性（学習成果）」と在学時の教育プロセスなどとの関係性を多変量解析により分析し、その規定因子を見出した。それらを踏まえ、IR の主体として A 専門学校の課題と教育改善の方向性を示した。

2 章 調査概要と分析対象校

2. 1 調査概要

本稿で取り扱う 3 つの専門学校は、大都市（異なる地域）に所在する工業（情報・グラフィックデザイン・コンテンツ）分野の専門学校で、1000 名以上が在籍する所謂大規模校である。

専門学校は、学科の創設（設置）が他の高等教育機関と比較して容易であるため、それぞれの地域の産業やニーズに応じて、様々な学科が設置されている。同じ工業（情報・グラフィックデザイン・コンテンツ）分野の専門学校でも、設置学科は異なる。表 2-1 は調査対象専門学校の設置学科から導いた主な教育分野である。

卒業後約 10 年間の初期キャリア形成を把握するために、2012 年 EQ 研の卒業生調査と同様に、対象者を卒業後 1 年目、5 年目、9 年目の 3 コーホートとした。本来、卒業後 10 年間の状況を把握するためには、10 年の歳月をかけた卒業生の追跡調査が必要である。3 つのコーホートは、それぞれ別の「世代」「時代」「年齢」特有の影響を受けている。吉本（2007）がいうように「時代・世代・年代のアイデンティフィケーション」の影響を拭えない。しかし、「職場で求められる能力」「職場における責任」「所得の伸び」などは、就業後の経験年数に応じて 3 つのコーホートに共通して変化して行くものと考えられることから、本稿では 3 コーホートの比較を卒業生の経年変化と捉えて示した。

表 2 - 1 調査対象専門学校の主な教育分野

学校名	主な教育分野
A 専門学校	情報処理、コンピュータネットワーク、セキュリティ、ゲーム制作、コンピュータグラフィックス、グラフィックデザイン、Web デザイン
B 専門学校	情報処理、情報ビジネス、セキュリティ、情報キャリア、Web デザイン、ゲーム制作、CAD、コンピュータグラフィックス、イラスト、コンピュータミュージック
C 専門学校	情報処理、情報ビジネス、コンピュータネットワーク、ゲーム制作、CAD、コンピュータグラフィックス、グラフィックデザイン、Web デザイン

「就業形態」「従業員数」「年収」などの項目から「学歴に相応しい処遇」「職場に対する満足度」など卒業生が個々に判断する項目、「現在の仕事に求められる能力とその獲得状況」など多岐にわたり調査し、3校の類似性と独自性を網羅的に把握した。

先に示した通り、今回の卒業生調査では、2012年にEQ研が実施した卒業生調査の調査枠組みと調査項目を活用している。調査枠組みと調査項目数を表2-2に示す。

表 2 - 2 卒業生調査の枠組みと調査項目数

No.	調査枠組み	調査項目数
1	出身学科・専攻とあなた自身について	5
2	在学時の学習・学校生活について	38
3	卒業後の進路・就業経験について	9
4	現在の仕事について	21
5	仕事や生活に必要な能力について	54
6	これまでの生活や家族について	9
7	これまでの経験を総合的に振り返って	12
	合 計	148

図2-1は、A専門学校をモデルに入学から就業に至る過程を示したものである。

学生は卒業後に就きたい職種に応じた学科を選択し入学する。調査対象専門学校の学生の内訳は、割合の差はあるが高等学校新卒者が過半数を占める。残りは、大学・短期大学の卒業または中途退学者、社会人経験者などといった日本人と主にアジア諸国からの留学生である。在学期間中（教育プロセス）は、学科毎のクラス単位で授業（講義や実習）が行われ、選択科目は少なく、クラスに在籍する全ての学生が同じ科

目を履修することが基本となっている。学習した内容を活かした就職を果たすことが、学生にとっても主とした目的であるため、入学当初より就職に関する指導が行われている。その他、生活面や学習面の指導は、主にクラス担任を中心に行われている。

学園生活では、クラブ活動や学園祭・体育祭など各専門学校の特色に応じて行われている。図 2 - 1 中の数字は、表 2 - 2 の調査枠組みの番号を示している。

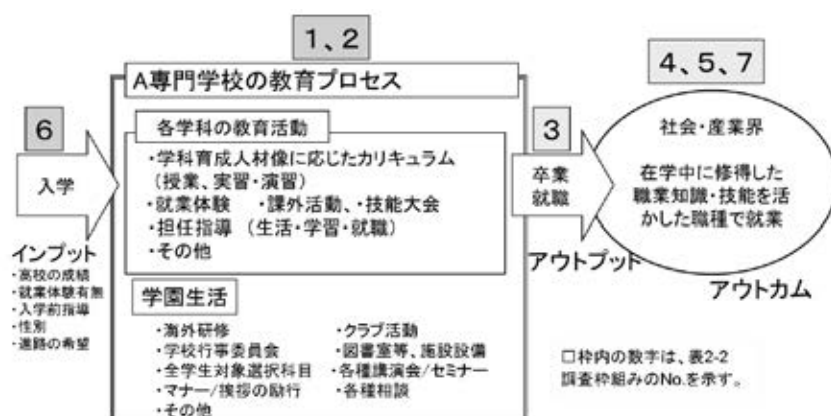


図 2 - 1 専門学校への入学から就業に至る過程と調査枠組み

図 2 - 2 は、今回の卒業生調査のシステムの概要である。今回の卒業生調査では、安価に調査が行えるように、Google が提供している無償のクラウドサービスを活用して、Web 調査システムを構築した。卒業生への各質問項目は、Google フォームのアンケートシステムを用いるが、自動的に割振られる URL は、数字と文字列からなる非常に長いもので、そのまま使用することは現実的ではない。このため、他のサーバで短い URL にリダイレクトする。回答者には、この短い URL を案内し、そのページから Google フォームのアンケートシステムにリンクする仕組みとした。短い URL の設定は、今回の調査で専用のサーバを使用したか、各学校のオフィシャル Web サイトのサーバを使用することも可能である。

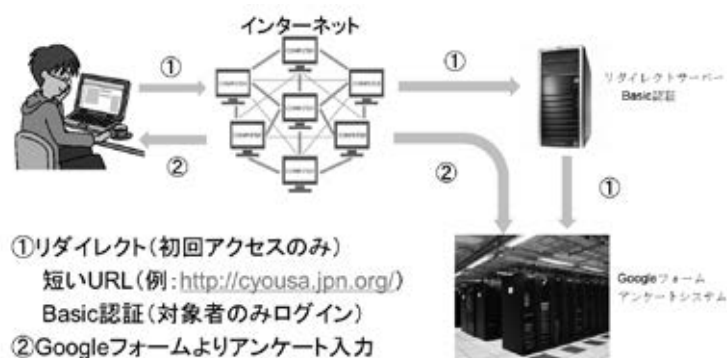


図 2 - 2 Google ドライブ Web 調査システム

調査実施の流れは次の通りである。図 2 - 3 に示すように各卒業生には、郵送にて卒業生調査の実施・協力の案内（①）を送付する。

卒業生は、その書面に記述されている ID とパスワードにより Web 調査システムにアクセス（①）し、Web ページに記載されている各調査項目に回答する（②③）。回答状況は、調査期間中随時確認することができる。回答状況が捗々しくない場合、それぞれの学校の判断で督促状を送付し回答の促進を図る。回答結果は、CSV 形式のファイルをクラウドの Google サーバからダウンロードして入手する。

今回の卒業生調査では、2012 年に EQ 研が行った卒業生調査の調査枠組みと調査項目を活用したため、②の学校からの挨拶ページのなかで、その旨を表示した。



図 2 - 3 Web 調査システムによる卒業生調査の流れ

2. 2 卒業生調査回答状況

3 校の調査対象の卒業年、発送数、回答数、調査期間は、表 2 - 3 の通りである。

表 2 - 3 の発送数は、卒業生に対して案内文を発送した数である。送付数は、発送数から不在等で案内文が戻ってきた分を引いた数である。回答率は、送付数に対する回答数の割合である。（C 専門学校では、卒業年毎の回答率は発送数が分母となっている。）

回答率は、3 校全体で 11.8% である。最も高い C 専門学校（12.25%）と最も低い B 専門学校（10.08%）との差は、2.17 ポイントである。

B 専門学校は、2012 年 EQ 研の卒業生調査で 2011 年・2012 年、2007 年・2008 年、2003 年・2004 年の 3 コーホートを調査対象としていたため、今回は 2013 年、2009 年、2005 年卒業生を対象とした。他の 2 専門学校より 1 年卒業後の経過年数が多くなっている。

表 2 - 3 調査回答状況

学校名	卒業年	発送数(a)	送付数(b)	回答数(c)	回答率(c/b)	調査期間
A 専門学校	2014 年	691	622	76	12.2%	2015 年 7 月 1 日 ～ 9 月 13 日
	2010 年	767	603	68	11.3%	
	2006 年	909	618	76	12.3%	
	小 計	2,367	1,843	220	11.9%	
B 専門学校	2013 年	188	179	22	12.29%	2015 年 8 月 4 日 ～ 9 月 14 日
	2009 年	278	272	33	12.13%	
	2005 年	273	263	17	6.46%	
	小 計	739	714	72	10.08%	
C 専門学校	2014 年	507	—	62	(12.23%)	2015 年 8 月 1 日 ～ 9 月 1 日
	2010 年	746	—	85	(11.39%)	
	2006 年	854	—	84	(9.84%)	
	小 計	2,107	1,886	231	12.25%	
合 計		5,213	4,443	523	11.8%	

表 2 - 4 に、2012 年 EQ 研による卒業生調査の A 専門学校、B 専門学校の回答状況を参考に示す。

表 2 - 4 2012 年 EQ 研卒業生調査の回答状況

学校名 (対象分野)	発送数	回答数			回答率
		回答総数	卒業年	回答数	
A 専門学校 (IT、情報処理、CG、ゲーム、デザイン)	2,093	300	2012	111	14.3%
			2008	100	
			2004	89	
B 専門学校 (IT、情報処理、CAD、CG、ゲーム、デザイン)	1,589	186	2012・2011	71	11.8%
			2008・2007	66	
			2004・2003	49	

3 章 初期キャリア形成状況

卒業から約 10 年程度の初期キャリアの概略を把握するために、卒業年に関わらず回答全体を集計した結果を確認する。

次に、卒業後 1 年、5 年、9 年の 3 コーホートに分けて集計し、卒業後の就業経験を通じて、卒業生がどのように変容していくかを確認する。

3. 1 回答全体の集計

3校の卒業生からの回答を、それぞれの専門学校毎に集計した結果を示す。先ず、現在の就業形態や年収などの項目を、次に職場における処遇や職場に対する評価、仕事に必要な能力とその獲得状況など、卒業生個々の判断による項目を示す。

(1) 現在の就業状況

ここでは、卒業生が現在何を主にしているのか、また就業している場合、その仕事と在学中に専攻（学習）した分野との関連性や就業形態、所得、勤め先の従業員数など、基本的な概要を確認する。

図3-1は、「現在（この1ヶ月）主に何をしているのか。」を確認したものである。3校とも「仕事をしている人」の割合が8割以上と最も多く、次に求職活動となっている。

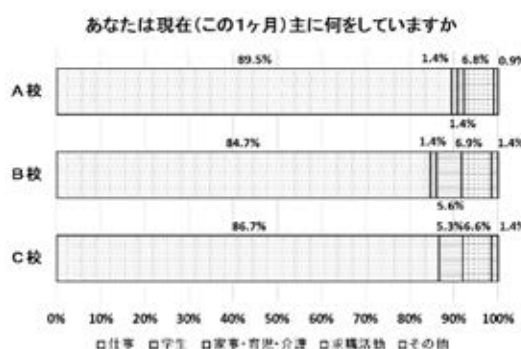


図3-1 現在主にしていること

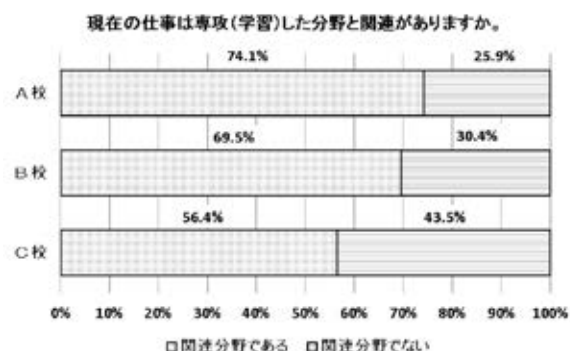


図3-2 仕事と専攻分野との関連性

図3-2は、仕事と専攻（学習）分野との関連性を示すものである。3校が主に教育している情報処理やグラフィックデザインの分野は、エンジニアやクリエイターなど開発者としての仕事が最も専攻分野に適した仕事である。学習内容には、コンピュータの基本操作などITリテラシーも含まれている。こうした内容は、現在多くの仕事で共通して求められている能力である。今回の結果には、開発者としての仕事以外に、コンピュータの基本操作も含め、「関連分野である。」と回答している人も考えられる。

学習した分野と関連している人の割合は、A専門学校：74.1%、B専門学校：69.5%、C専門学校：56.4%となる。

吉本（2015）の報告によると、2012年EQ研による卒業生調査では、専門学校卒業生の「専攻分野と仕事との関連性」に関する回答結果では、全体では77.4%、工業（情報含む）では69.2%、デザインでは69.9%が関連する仕事に従事している。他の分野では、医療系国家資格の分野が9割以上と高く、ビジネス・観光といった分野では5割程度と報告されている。今回の調査結果もほぼ同様の傾向を示している。

図3-3は、現在の就業形態を示すものである。

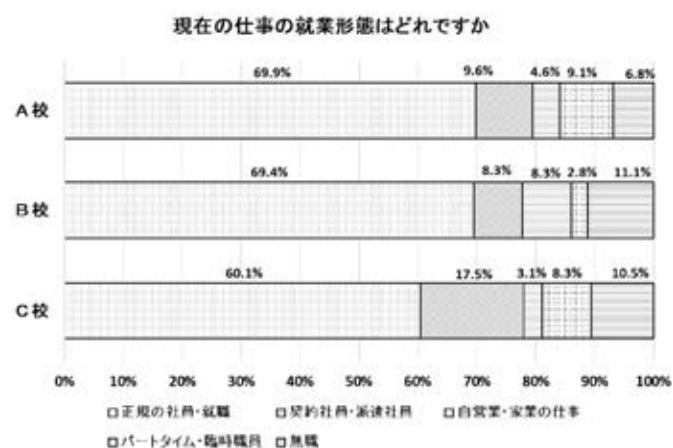


図 3 - 3 現在の仕事（１年以内）の就業形態

３校ともに、正規雇用の割合が最も高い。A 専門学校 69.9%、B 専門学校 69.4% であるのに対して、C 専門学校は 60.1% と約 10 ポイント低く、その分契約・派遣の割合が高くなっている。

図 3 - 4 は、現在働いている企業の従業員数を示すものである。３校とも 100 名未満の割合はほぼ等しい。300 名以上の割合は、A 専門学校が 30.7% と最も多い。また、C 専門学校では、不明の割合が他の 2 校の 2 倍以上になっている。これは、就業形態が契約・派遣社員の割合が多いことに起因していると考えられる。

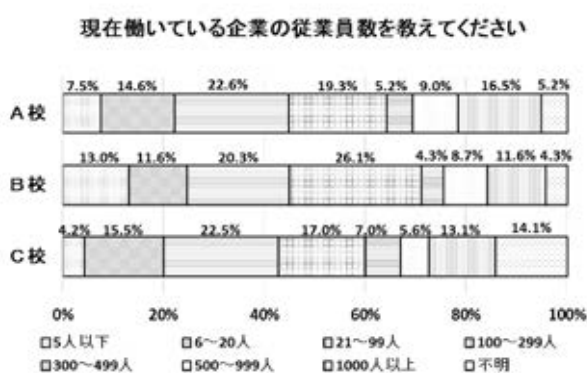


図 3 - 4 現在働いている企業の従業員数

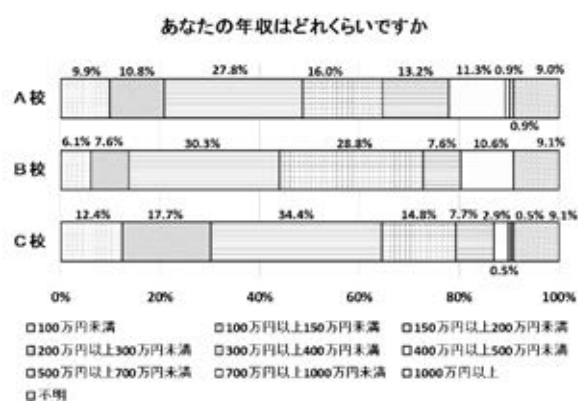


図 3 - 5 現在の年収

図 3 - 5 は、現在の年収を示すものである。300 万円以上の割合は、C 専門学校<B 専門学校<A 専門学校の順で、多くなっている。この違いは地域性によるものとも考えられる。

（２）専門学校卒業生の職場における待遇と職場に対する評価

図 3 - 6 は、「責任の重さ」「賃金水準」「昇給や昇格」の項目から、現在の職場で専門学校卒業という学歴に相応しい評価を受けているかを、5「評価されている」から1「評価されていない」の5段階で、回答を求めている。

何れの項目において3校とも3「どちらともいえない」の割合が最も多い。また、「わからない」の回答を除くと、4以上の「評価されている」側の割合が、2以下の「評価されていない」側の割合よりも上回っている。3校を比較すると、「責任の重さ」「賃金水準」「昇給や昇格」ともにA専門学校が最も高く、逆にC専門学校が最も低い。特に、賃金水準の「評価されている」では、A専門学校：16.0%に対して、C専門学校：6.0%と10ポイントの差がある。

図 3 - 5 で示した通り、年収の多さは、C専門学校<B専門学校<A専門学校の順になっており、C専門学校の卒業生が低い賃金水準に起因して、学歴に相応しい評価としては「評価されていない」と感じる人の割合が多くなっていると推察される。

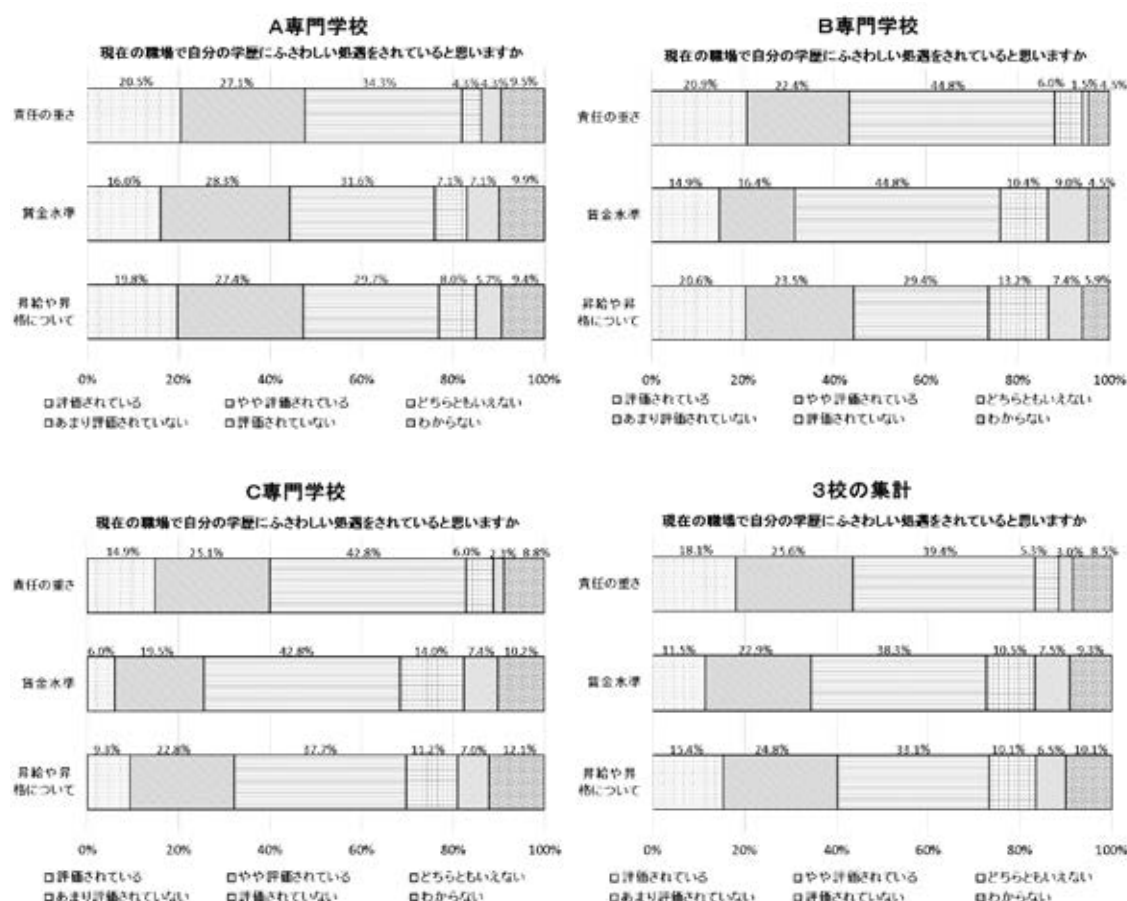


図 3 - 6 現在の職場で学歴に相応しい処遇をされているか

図3-7は、四年制大学・短期大学の卒業生と比較して、同等に評価されているのかを5「同等以上」～1「同等以下」の5段階と0「わからない」の選択肢による調査結果である。

四年制大学・短期大学の卒業生と比較して、3校とも「同等」に評価されていると回答した人の割合が最も多い。

短期大学との比較では、「わからない」の回答を除くと4以上の割合が2以下の割合より、A専門学校では0.5ポイント高いのに対して、B専門学校では4.4ポイント、C専門学校では9.2%低くなっている。修業年限がほぼ等しい短期大学に対して、B専門学校・C専門学校では「同等以下」の評価を受けていると感じている人の割合が多い傾向を示している。

同様に四年制大学との比較では、3校ともに「同等」と回答している人の割合が最も多いものの、4以上の割合より2以下と回答する人の割合が多くなっている。特にB専門学校では、4以上の割合に対して、2以下の割合の差が、26.6ポイントと大きく離れている。

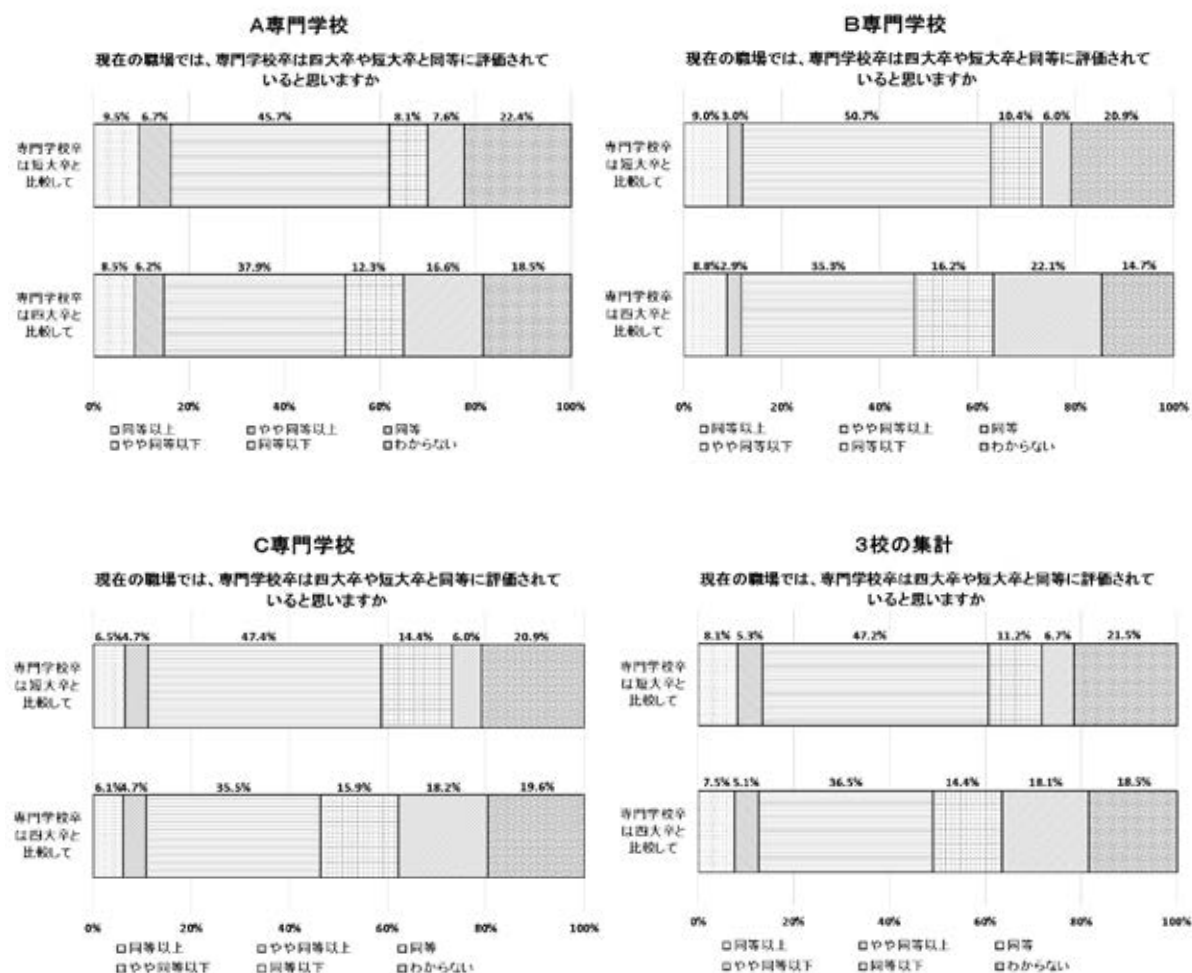


図3-7 四大・短大と同等に評価されているか

3校の比較では、四年制大学・短期大学の学歴に対して同等以上に評価されていると回答する人の割合は、C 専門学校<B 専門学校<A 専門学校の順に多くなっている。

図3-8は、職場に対する満足度を、「学校で得た知識・技能を活用する場として」や「職場の雰囲気の高さ」「収入や福利厚生」など多様な項目について、5「とても満足」から1「とても不満」の5段階で調査した結果である。

3校とも、何れの項目も4以上と回答した人の割合は、2以下と回答した人の割合を大きく上回り、現在の職場に対する満足度は高い結果となっている。

「とても満足」が最も高い割合の項目は、それぞれの専門学校で異なる。最も低い割合の項目は、「収入や福利厚生」と共通しており、この項目が「やや不満」「とても不満」を合わせた割合が最も高くなっている。

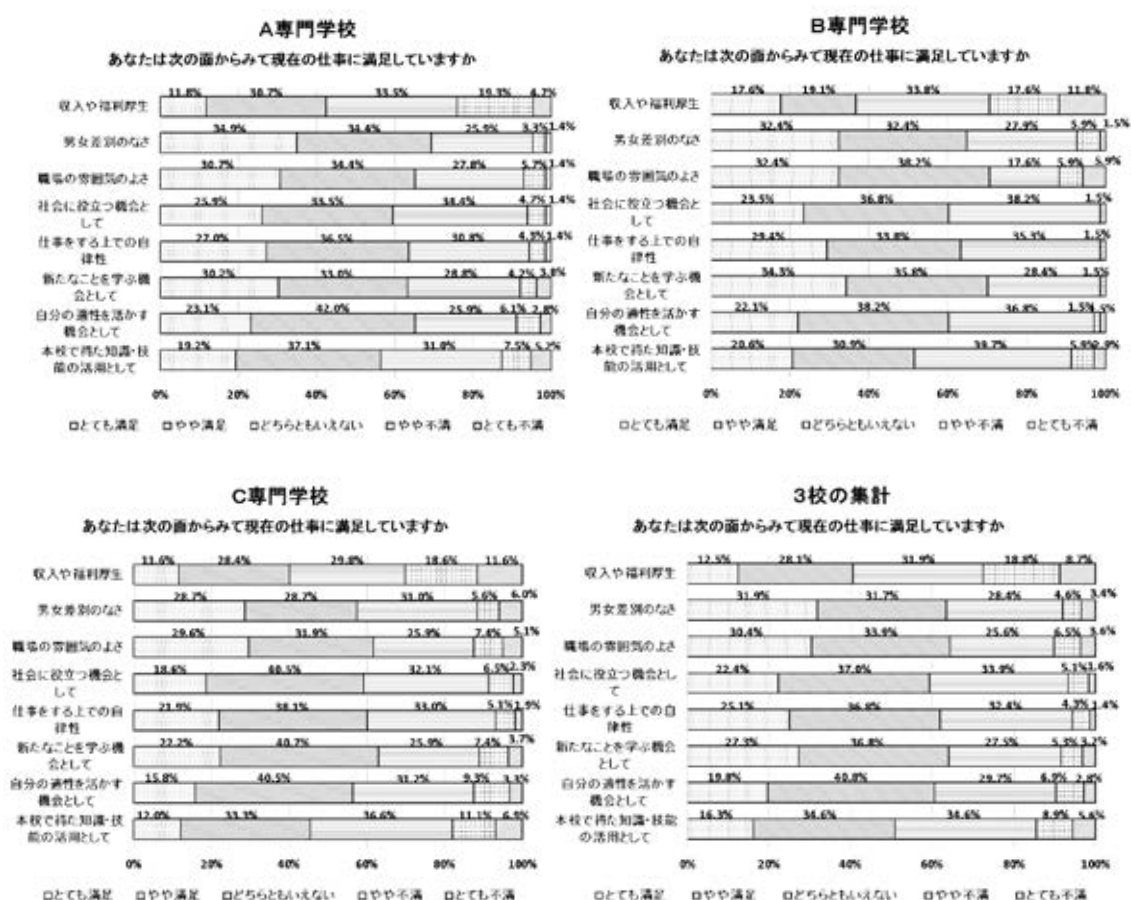


図3-8 職場に対する満足度

3校の傾向として、「新たなことを学ぶ機会として」「自分の適性を活かす機会として」「社会に役立つ機会として」といった項目で、過半数以上の人々が満足を感じている。自身の成長を図りつつ会社や社会に貢献するといった姿が伺え、そうした仕事に高い満足を感じている。卒業後10年近く経過している人も含まれるため「本校で得た知識・技能の活用として」の満足度は相対的に高くない。

（３）仕事に必要な能力の必要性和獲得状況

表３－１は、現在の仕事に必要な能力の必要性に関する調査結果である。５「とても必要である」～１「全く必要ない」の５段階で、現在の仕事での必要性を問い、その結果の「平均値」、平均値の高い「順位」「標準偏差」「データ数」をまとめた。

仕事に必要な能力を、2012年EQ研の卒業生調査では次のような枠組みで分類している。今回の調査でもこの枠組みを活用しているため、本稿でもその枠組みを用いて記述する。

<基礎知識>

- １．高校卒業程度の一般知識
- ２．高校卒業までの数学や理科または美術や音楽などの基礎知識

<専門的な知識>

- ３．専攻（学習）分野に直接関わる専門知識
- ４．インターネット・ICT機器の活用やデータ処理など
専攻（学習）分野の周辺領域の専門知識
- ５．専攻分野以外の高度な知識

<専門的な技能>

- ６．専攻分野に直接関わる技能

<基礎的・社会的な技能>

- ７．担当業務の課題を発見し解決する技能
- ８．優先順位をつけて仕事の段取りをする能力
- ９．時間を管理する技能
- 10．組織やチームで自分の役割を認識し貢献できる能力
- 11．顧客や外部とのコミュニケーション能力
- 12．仕事をする上で必要なマナー
- 13．生涯学び続ける力

仕事に必要な能力項目は、１．「高校卒業程度の一般知識」から６．「専攻分野に直接関わる技能」までは基礎知識または専門的な知識・技能であるのに対して、７．「担当業務の課題を発見し解決する技能」から１３．「生涯学び続ける力」までは、職業人としての基礎的・社会的な技能に関するものである。

集計結果では、「基礎的・社会的な技能」（７～１３）に関する能力の必要性が高く、「基礎知識または専門的な知識・技能」（１～６）に関する必要性は低い傾向を示している。

各平均値の結果より、最も仕事で求められている能力は、３校ともに８．「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」であり、２番目に求められる能力は、９．「時間を

管理する技能」となっている。3 番目～7 番目まで、多少の順位の差はあっても、何れも「基礎的・社会的な技能」の項目である。

採用面接などで特に重要視されている 11.「顧客や外部とのコミュニケーション能力」の必要性は、A 専門学校および B 専門学校で 7 番目、C 専門学校でも 5 番目と相対的に上位ではない。

表 3 - 1 仕事に必要な能力の必要性

No	仕事に必要な能力	A 専門学校				B 専門学校				C 専門学校			
		平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数
1	高校卒業程度の一般知識	3.69	9	1.03	216	3.49	11	1.10	69	3.52	8	1.03	222
2	高校卒業までの数学や理科または美術や音楽などの基礎知識	3.11	13	1.14	215	2.97	13	1.19	69	2.93	13	1.11	220
3	専攻(学習)分野に直接関わる専門知識	3.72	8	1.20	214	3.88	8	1.20	69	3.34	10	1.29	220
4	インターネット・ICT 機器の活用やデータ処理など専攻(学習)分野の周辺領域の専門知識	3.68	10	1.15	213	3.68	9	1.20	69	3.50	9	1.18	222
5	専攻(学習)分野以外の高度な知識	3.38	12	1.06	215	3.26	12	1.17	68	3.27	11	1.23	222
6	専攻(学習)分野に直接関わる技能	3.61	11	1.16	214	3.54	10	1.32	68	3.22	12	1.21	221
7	担当業務の課題を発見し解決する技能	4.07	5	0.96	215	4.12	5	0.96	69	3.88	6	0.94	218
8	優先順位をつけて仕事の段取りをする能力	4.30	1	0.82	214	4.39	1	0.82	69	4.19	1	0.88	219
9	時間を管理する技能	4.25	2	0.87	214	4.25	2	0.94	69	4.09	2	0.90	219
10	組織やチームで自分の役割を認識し貢献できる能力	4.08	4	0.89	213	4.13	4	1.01	69	3.95	4	0.97	219
11	顧客や外部とのコミュニケーション能力	4.01	7	1.13	214	3.97	7	1.12	68	3.94	5	1.14	218
12	仕事をする上で必要なマナー	4.15	3	0.91	214	4.03	6	0.98	68	4.02	3	0.90	219
13	生涯学び続ける力	4.07	6	0.98	215	4.20	3	0.84	69	3.84	7	0.96	219

3 校比較で、平均値の最も高い値に背景色を付けた。

また、「基礎知識または専門的知識・技能」の側では、A 専門学校、B 専門学校では 3.「専攻(学習)分野に直接関わる専門知識」が 8 番目と最も高く、C 専門学校では 1.「高校卒業程度の一般知識」が 8 番目で最も高くなっている。

専門学校教育の中心ともいえる 6.「専攻(学習)分野に直接関わる技能」は、A 専門学校では 11 番目、B 専門学校では 10 番目、C 専門学校では 12 番目と下位である。専門性に関する項目の必要性は、総じて低い順位である。

各能力項目の「平均値」について 3 校を比較すると、最も高い値となるものは、A

専門学校かB専門学校であり、C専門学校の値は何れの項目も低い傾向を示している。

表3-2は、仕事に必要な能力の獲得状況に関する調査結果である。能力項目は、表3-1の各項目と等しいものである。能力の獲得状況について、5「十分身につけている」～1「ほとんど身につけていない」の5段階で回答を求めた。その「平均値」、平均値の高い「順位」「標準偏差」「データ数」を専門学校毎に示した。

表3-2 仕事に必要な能力の獲得状況

No	仕事に必要な能力	A 専門学校				B 専門学校				C 専門学校			
		平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数
1	高校卒業程度の一般知識	3.54	6	1.00	219	3.48	9	1.01	71	3.28	10	0.88	225
2	高校卒業までの数学や理科または美術や音楽などの基礎知識	3.24	12	0.98	217	3.18	13	0.97	71	3.07	13	0.92	225
3	専攻(学習)分野に直接関わる専門知識	3.52	7	0.89	218	3.59	4	0.82	70	3.36	8	0.92	223
4	インターネット・ICT機器の活用やデータ処理など専攻(学習)分野の周辺領域の専門知識	3.47	9	0.91	217	3.49	8	0.82	71	3.35	9	0.95	224
5	専攻(学習)分野以外の高度な知識	3.15	13	0.93	217	3.21	12	0.80	71	3.07	12	1.03	224
6	専攻(学習)分野に直接関わる技能	3.38	11	0.92	217	3.51	7	0.80	71	3.24	11	0.94	224
7	担当業務の課題を発見し解決する技能	3.62	3	0.88	218	3.59	3	0.83	71	3.41	6	0.85	224
8	優先順位をつけて仕事の段取りをする能力	3.70	1	0.88	216	3.79	1	0.86	70	3.54	3	0.83	223
9	時間を管理する技能	3.62	4	0.86	215	3.54	5	0.96	71	3.55	2	0.86	224
10	組織やチームで自分の役割を認識し貢献できる能力	3.55	5	0.91	216	3.62	2	0.88	71	3.49	5	0.88	224
11	顧客や外部とのコミュニケーション能力	3.44	10	1.08	217	3.39	10	0.90	71	3.52	4	1.03	224
12	仕事をする上で必要なマナー	3.66	2	0.94	217	3.54	6	0.80	71	3.63	1	0.84	222
13	生涯学び続ける力	3.49	8	0.93	218	3.33	11	0.92	70	3.39	7	0.85	223

3校比較で、平均値の最も高い値に背景色を付けた。

集計結果から、3校に共通して、「基礎知識または専門的な知識・技能」(1～6)の項目の獲得水準が低く、「基礎的・社会的な技能」(7～13)の項目の獲得水準が高い傾向にある。

A 専門学校・B 専門学校では、獲得水準が最も高い能力は8.「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」であり、これは表3-1の必要性と等しい項目である。C 専門学校では、12.「仕事をする上で必要なマナー」の獲得水準が最も高くなっている。

「基礎知識または専門的な知識・技能」(1～6)の項目で最も高い順位の項目は、A

専門学校では 1.「高校卒業程度の一般知識」（順位 6）、B 専門学校では 3.「専攻（学習）分野に直接関わる専門知識」（順位 4 位）、C 専門学校も 3.「専攻（学習）分野に直接関わる専門知識」であるが、順位は 8 位となっている。

専門学校教育の中心ともいえる 6.「専攻（学習）分野に直接関わる技能」は、A 専門学校、C 専門学校ともに下位の 11 位、B 専門学校でも 7 位となっており、獲得水準は低くなっている。

3 校の比較では、各能力項目の平均値が最も高いものは、A 専門学校と B 専門学校が多く、C 専門学校が最も高い項目は、11.「顧客や外部とのコミュニケーション能力」のみである。表 3 - 1・表 3 - 2 を通して、C 専門学校の回答値は低い傾向がある。

3. 2 卒業年コーホート別集計

卒業年毎に集計して、卒業後の経年変化を確認する。B 専門学校の回答数が少ないため、それぞれの学校の卒業年毎に集計し比較を行っても妥当性が低い。このため、IR の主体である A 専門学校と、同分野の専門学校卒業生という観点で、B 専門学校・C 専門学校のデータをまとめた集計結果とを比較した。

3 つのコーホートは「時代・世代・年代」の異なるものではあるが、職場における経年変化として、卒業後の経過年数の差が初期キャリアの形成にどのように影響しているかを把握する。

（1）就業状況の経年変化

図 3 - 9 は、勤め先従業員数を卒業年毎に集計したものである。

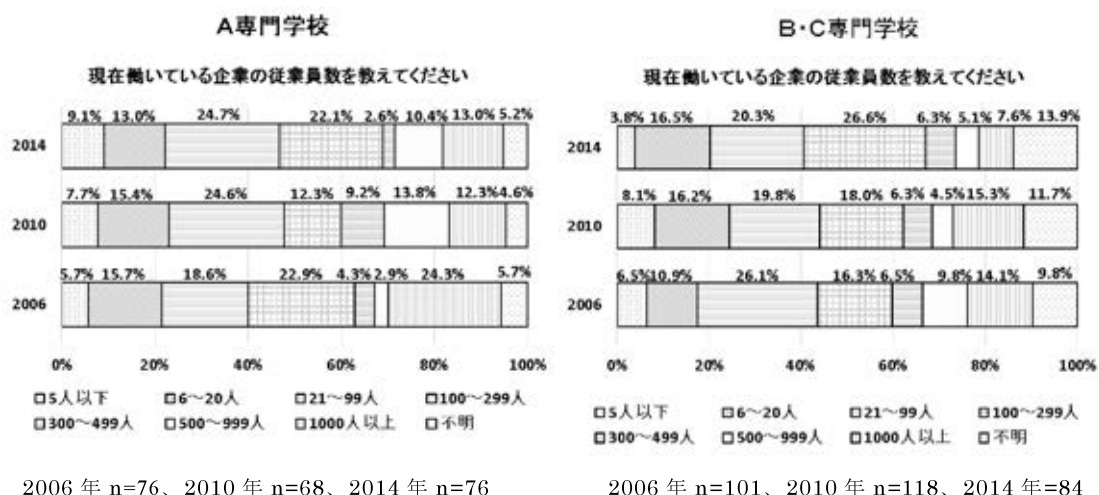


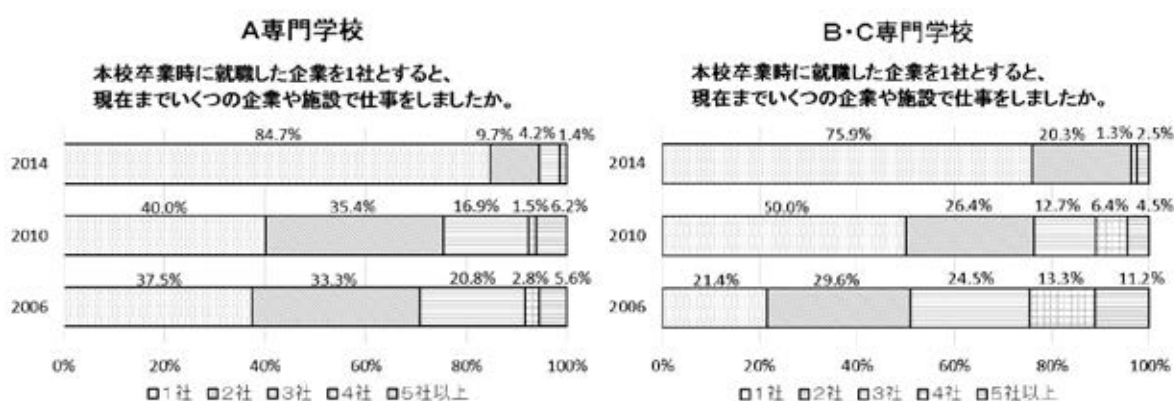
図 3 - 9 就職先企業の従業員数

従業員数 500 名以上の割合が、卒業からの経過年数が増すに従って僅かではあるが、増加していることが確認できる。この従業員数 500 名以上の割合を経年で、A 専門学校と B・C 専門学校の集計を比較すると、何れの年代も A 専門学校の割合が多い。

卒業後 1 年（2014 卒） A 専門学校：23.4% > B・C 専門学校：12.7%
 卒業後 5 年（2010 卒） A 専門学校：26.1% > B・C 専門学校：19.8%
 卒業後 9 年（2006 卒） A 専門学校：27.2% > B・C 専門学校：23.9%

図 3 - 10 は、卒業後の勤め先企業数を示すものである。卒業時に就職した企業を 1 社目として、いくつの企業・施設で仕事をしたかで示している。

A 専門学校および B・C 専門学校の集計ともに、卒業後 5 年経過すると、過半数の人が 2 社目以上となっている。3 校の主な教育分野である IT 産業は、慢性的な人材不足で雇用の流動性が高い。独立行政法人情報処理推進機構『IT 人材白書 2015』（2015）によると、IT 企業の人材確保の取組みに関する調査で、約 7 割の企業が「中途採用（キャリア採用）の拡大」と回答している。ある程度の経験と能力を持った専門職者は、条件のよい企業に積極的に移っていく傾向がある。



2006 年 n=76、2010 年 n=68、2014 年 n=76

2006 年 n=101、2010 年 n=118、2014 年 n=84

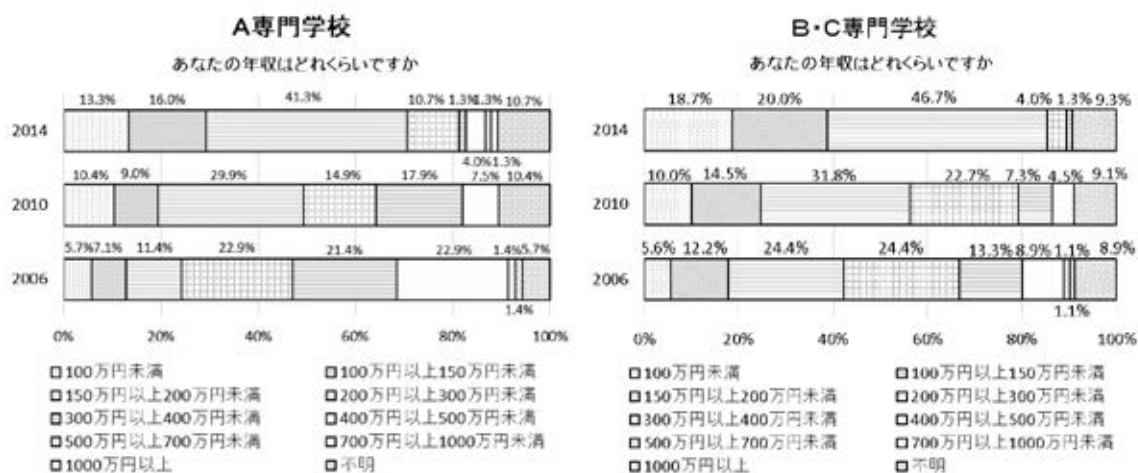
図 3 - 10 勤め先企業数

図 3 - 9 で、就職先企業の従業員数 500 名以上の割合が経年で増加していることを示した。企業を移る人の割合も経年で増加している点から、従業員数の多い条件のよい企業へ移っている人の割合が多いことが考えられる。IT 業界の動向を反映した結果といえるであろう。

A 専門学校では、5 年目から 9 年目での 1 社目の割合は、2.5 ポイントの差でしかないのに対して、B・C 専門学校の集計では 28.6 ポイントも差がある。A 専門学校は、他の 2 専門学校より就職先企業への定着率が高いことを示している。

図 3 - 11 は、卒業年毎に年収を集計したものである。卒業後の経過年数が増すにつれて、年収が増加していることが分かる。IT 産業では一般的な企業の賃金と同様、就業年限が増すにつれて賃金が増していく傾向があるため、それを反映した結果となっ

ている。



2006 年 n=76、2010 年 n=68、2014 年 n=76

2006 年 n=101、2010 年 n=118、2014 年 n=84

図 3 - 11 年収の推移

300 万円以上の年収の割合で、A 専門学校と B・C 専門学校の集計とを比較すると、何れの年代も A 専門学校の割合が多い。A 専門学校の所得が他の 2 校よりも高いことは、図 3 - 5 で確認していたが、経年でも他の 2 校より高いことが確認できた。これは、地域による所得格差の影響とも考えられる。

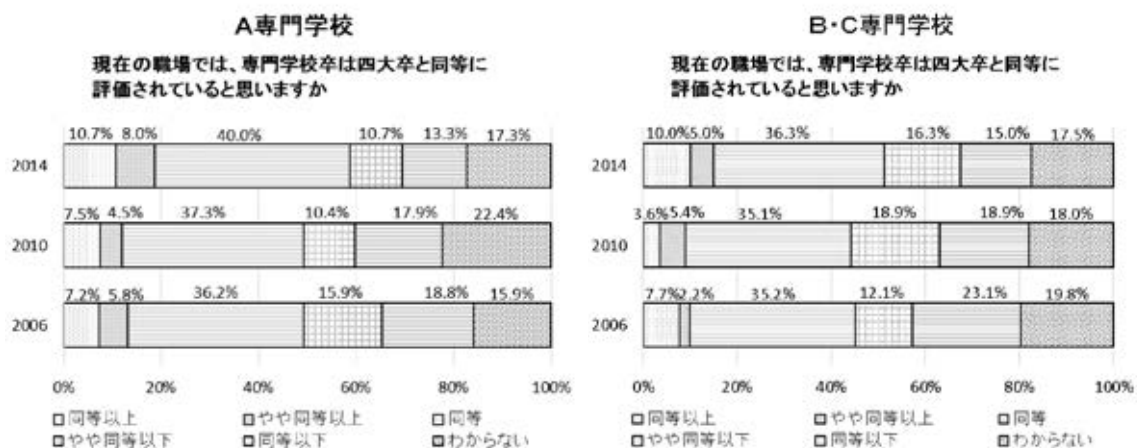
卒業後 1 年（2014 卒）	A 専門学校：7.9%	>	B・C 専門学校：1.3%
卒業後 5 年（2010 卒）	A 専門学校：25.4%	>	B・C 専門学校：11.8%
卒業後 9 年（2006 卒）	A 専門学校：47.1%	>	B・C 専門学校：24.4%

（2）四大卒と比較した評価の経年変化

図 3 - 12 は、図 3 - 7「四大・短大と同等に評価されているか」の四年制大学との比較を卒業年毎の 3 つのコーホート別に示したものである。

傾向として、卒業後の経過年数の増加に応じて「同等」の割合が減少し、「同等以下」の割合が増加している。四年制大学と比較して、同等以下の評価を受けていると感じる割合は、卒業後の経過年数に応じて増加している。

A 専門学校と B・C 専門学校の集計との比較で、何れの年代も「同等以上」「やや同等以上」を合わせた割合は、A 専門学校の方が多い。逆に「やや同等以下」「同等以下」を合わせた割合は、A 専門学校の方が少ない。A 専門学校は 3 校のなかでは、「同等」以上に評価されていると感じている人の割合は多く、「同等」以下と感じる人の割合は少ないといえる。



2006 年 n=76、2010 年 n=68、2014 年 n=76

2006 年 n=101、2010 年 n=118、2014 年 n=84

図 3 - 12 四大卒と比較した評価の経年変化

職場における学歴別の評価は、その職場における昇給や昇進、仕事における責任の重さなど様々な局面を通して自覚されるものと考えられる。

(3) 仕事に求められる能力の必要性和その獲得状況の経年変化

表 3 - 1 および表 3 - 2 で示した仕事に求められる能力の必要性和その獲得状況の内、「専攻（学習）分野に直接関わる専門知識」と「専攻（学習）分野に直接関わる技能」の項目と、基礎的・社会的な技能に関する項目の「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」と「時間を管理する能力」について経年変化をそれぞれ示す。

図 3 - 13 および図 3 - 14 は、「専攻分野に直接関わる専門知識」の必要性和その獲得状況について示したものである。

専門知識の必要性は、「とても必要」「かなり必要」を合わせると、どの年代もほぼ半数以上の人が必要を感じている。「とても必要」に着目すると、A 専門学校では 2014 年（卒業後 1 年目）より、2006 年（卒業後 9 年目）の方が必要性は増しているのに対して、B・C 専門学校では減少しており、傾向の違いが確認できる。その獲得水準は、「十分身につけている」「かなり身につけている」を合わせた割合では、A 専門学校の 2010 年を除けば、卒業後の経験年数が増すにつれて、徐々に増加している。

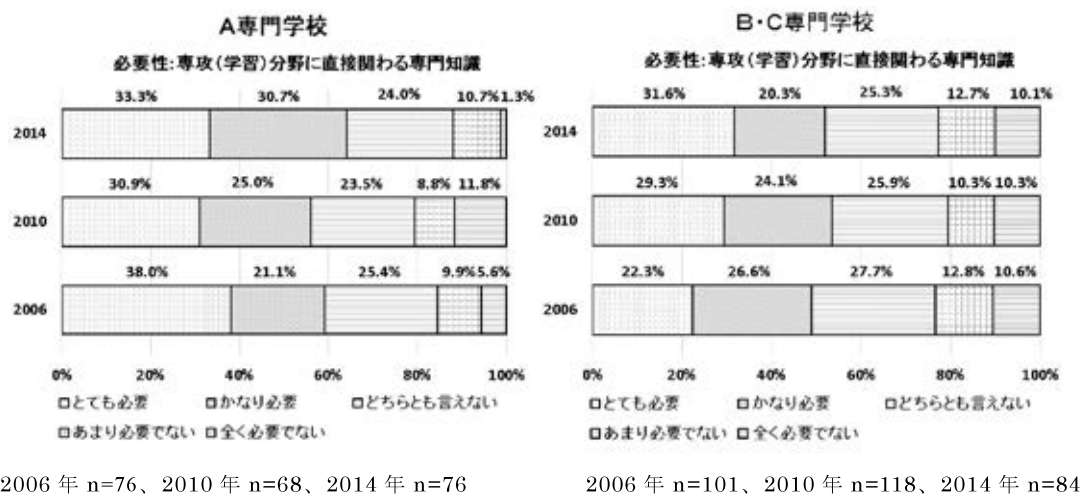


図 3 - 13 専攻分野に直接関わる専門知識の必要性の経年変化

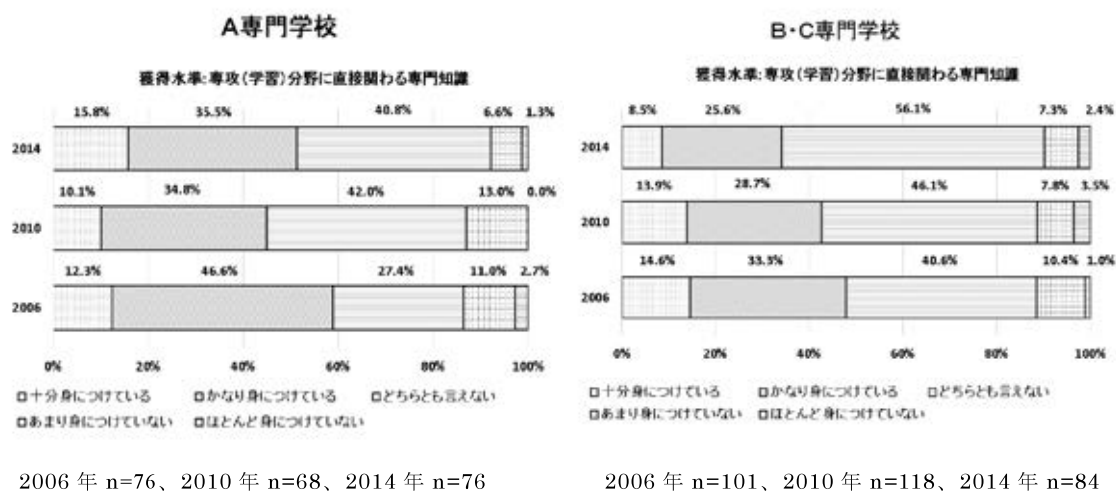


図 3 - 14 専攻分野に直接関わる専門知識の獲得状況の経年変化

A 専門学校と B・C 専門学校の集計とを比較すると、獲得状況は何れの年代も「十分身につけている」「かなり身につけている」を合わせた割合はA専門学校が高い。

卒業後 1 年 (2014 卒)	A 専門学校 : 51.3%	>	B・C 専門学校 : 34.1%
卒業後 5 年 (2010 卒)	A 専門学校 : 44.9%	>	B・C 専門学校 : 42.6%
卒業後 9 年 (2006 卒)	A 専門学校 : 58.9%	>	B・C 専門学校 : 47.9%

図 3 - 15 および図 3 - 16 は、「専攻分野に直接関わる技能」の必要性とその獲得状況について示す。技能についても、A 専門学校の 2010 年の必要性は若干低いものの概ねどの年代も 5 割以上の人が必要を感じている。「とても必要」に着目すると、A 専門学校では 2014 年（1 年目）より 2006 年（9 年目）の方が 10 ポイント以上必要性

は増しているのに対して、B・C 専門学校では 1.8 ポイント減少しており、先の専門知識同様、傾向の違いが確認できる。

その獲得状況は、「十分身につけている」「かなり身につけている」を合わせた割合は、経験年数に応じて緩やかにではあるが伸びている。

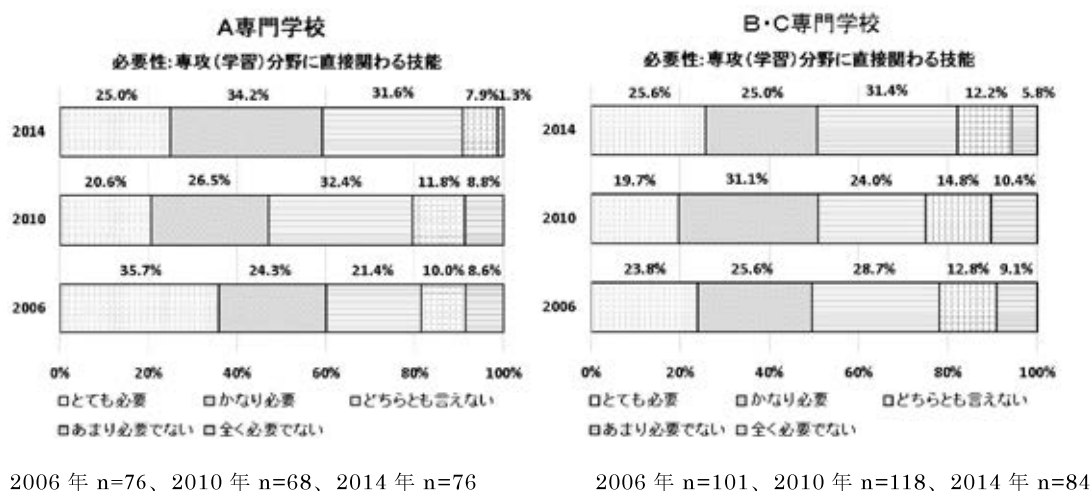


図 3 - 15 専攻分野に直接関わる技能の必要性の経年変化

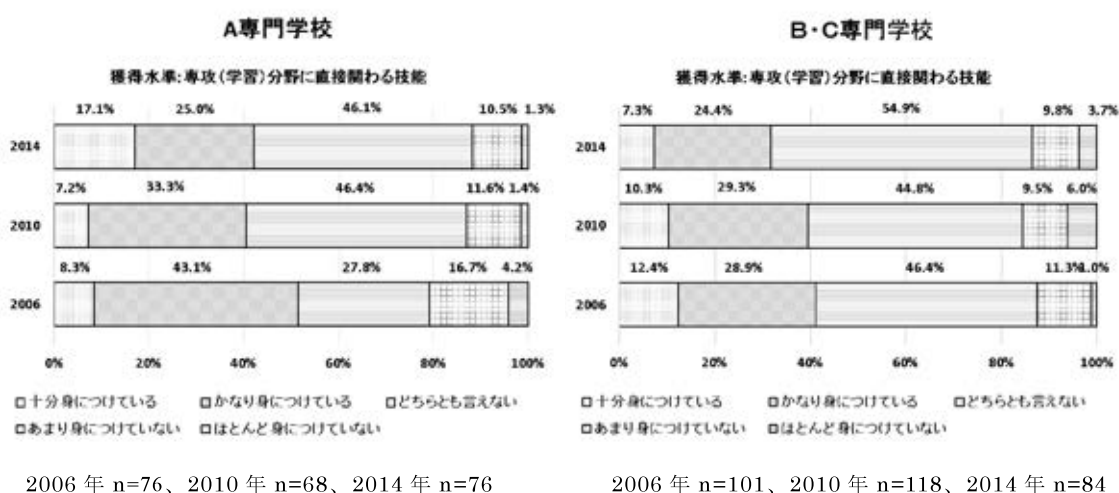


図 3 - 16 専攻分野に直接関わる技能の獲得状況の経年変化

A 専門学校と B・C 専門学校の集計とを比較すると、獲得状況は何れの年代も「十分身につけている」「かなり身につけている」を合わせた割合は A 専門学校が高い。

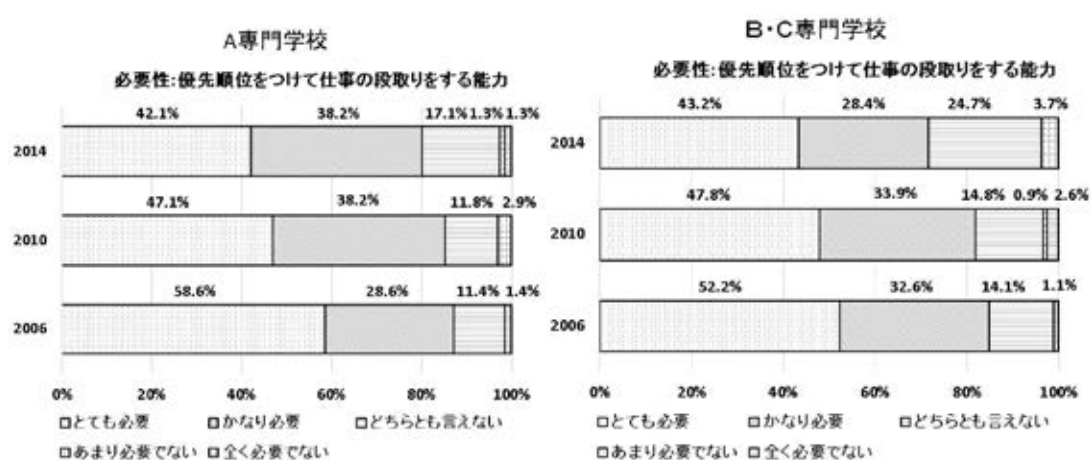
卒業後 1 年 (2014 卒)	A 専門学校 : 42.1%	>	B・C 専門学校 : 31.7%
卒業後 5 年 (2010 卒)	A 専門学校 : 40.9%	>	B・C 専門学校 : 39.6%
卒業後 9 年 (2006 卒)	A 専門学校 : 51.4%	>	B・C 専門学校 : 41.3%

専門学校卒業生にとって最も周囲から期待される専門知識・技術については、必要性があるものの、その獲得状況は緩慢な増加傾向である。

基礎的・社会的な技能の項目では、表 3 - 1 で必要性が高い水準にあった「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」と「時間を管理する技能」について示す。

図 3 - 17 および図 3 - 18 は、「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」に関する経年変化である。

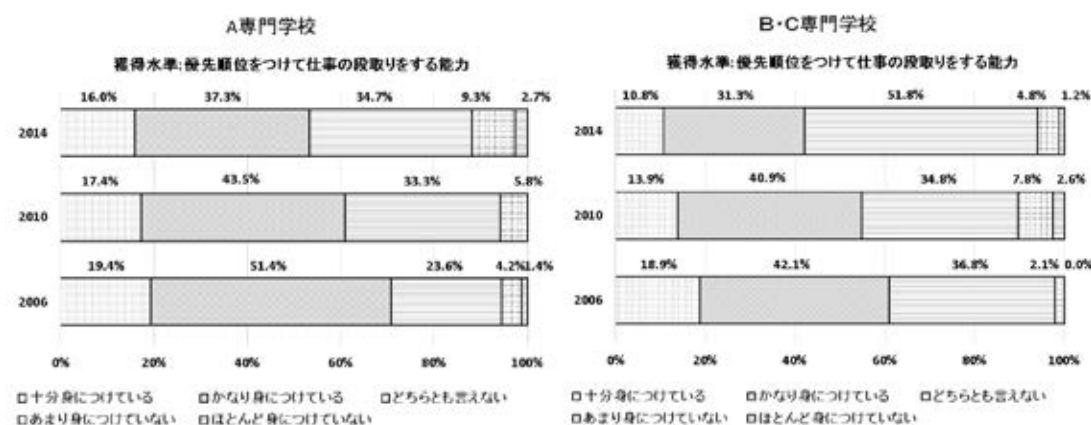
A 専門学校および B・C 専門学校の集計ともに、全ての年代で必要性は 7 割以上と極めて高い。また、就業後の経過年数に応じて着実に増している。その獲得状況も同様に就業年数に応じて増加しており、9 年目では 6 割以上の人が「身につけている」と回答している。



2006 年 n=76、2010 年 n=68、2014 年 n=76

2006 年 n=101、2010 年 n=118、2014 年 n=84

図 3 - 17 優先順位をつけて仕事の段取りをする能力の必要性の経年変化



2006 年 n=76、2010 年 n=68、2014 年 n=76

2006 年 n=101、2010 年 n=118、2014 年 n=84

図 3 - 18 優先順位をつけて仕事の段取りをする能力の獲得状況の経年変化

A 専門学校と B・C 専門学校の集計とを比較すると、獲得状況は何れの年代も「十分身につけている」「かなり身につけている」を合わせた割合はA専門学校が高い。

卒業後 1 年（2014 卒） A 専門学校：53.3% > B・C 専門学校： 42.1%
 卒業後 5 年（2010 卒） A 専門学校：60.9% > B・C 専門学校： 54.8%
 卒業後 9 年（2006 卒） A 専門学校：70.8% > B・C 専門学校： 61.0%

図 3 - 19 および図 3 - 20 は、「時間を管理する技能」について示す。

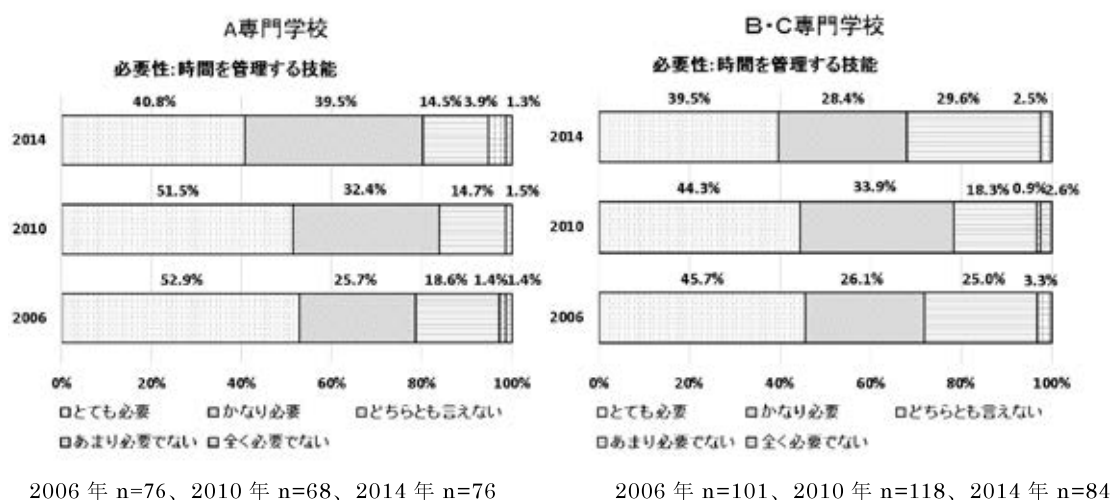


図 3 - 19 時間を管理する技能の必要性の経年変化

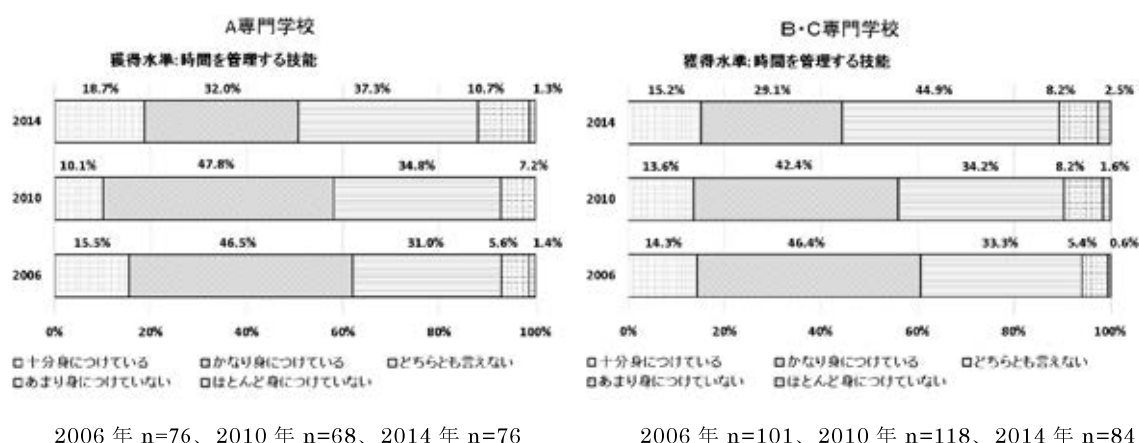


図 3 - 20 時間を管理する技能の獲得状況の経年変化

「とても必要」に着目すると就業後の経過年数に応じて必要性は増している。その獲得状況は、「十分身につけている」「かなり身につけている」人の割合は、就業経過年数に応じて増していることが確認できる。

A 専門学校と B・C 専門学校の集計とを比較すると、獲得状況は何れの年代も「十分身につけている」「かなり身につけている」を合わせた割合はA専門学校が高い。

卒業後 1 年（2014 卒）	A 専門学校：50.7%	>	B・C 専門学校：44.3%
卒業後 5 年（2010 卒）	A 専門学校：57.9%	>	B・C 専門学校：56.0%
卒業後 9 年（2006 卒）	A 専門学校：62.0%	>	B・C 専門学校：60.7%

仕事に必要な能力の必要性は、「専攻分野に直接関わる知識・技能」より「基礎的・社会的な技能」の方が、経年で顕著に増している。その獲得状況も「専攻分野に直接関わる知識・技能」より「基礎的・社会的な技能」の方が、経年で確実に伸びていることが確認できた。これは、「基礎的・社会的な技能」は就業を通した OJT によって獲得できるのに対して、専門的な知識・技能は職場を離れた研修（OFF-JT）への参加等が必要になるといった獲得方法の違いによるものとも考えられる。

A 専門学校と B・C 専門学校を比較すると何れの能力も「身につけている」と回答した人の割合は、A 専門学校が高い結果となった。

4 章 在学期間中の教育について

卒業生が専攻（学習）分野に関連する企業に就職し、就業経験を経た上で行う在学期間中の教育に対する評価は、専門学校改善にとって最も適切で有益な情報である。

また、在学期間中に何に熱心に取り組む、それが社会人としての初期キャリアを築く上でどのように影響したのかといったことも注目すべき点である。

ここでは、そうした卒業生の在学期間中の教育に対する評価や熱心に取り組んでいた事柄を把握する。

4. 1 学校が提供した教育に関する充実度

専門学校が在学中に提供した教育について、主に教育課程に関する 6 項目と教育課程以外の各種相談・指導や学校行事、施設などに関する 5 項目の充実度を調査した。充実度は、5「充実していた」～1「充実していなかった」の 5 段階で回答を求めた。

表 4-1 は、その「平均値」、平均値の序列を示す「順位」「標準偏差」「データ数」をまとめたものである。

3 校ともに、3.「専門の授業（講義と実習）」と 10.「就職支援（就職活動についての相談・支援）」が高い順位にあり、専門学校教育の特性をよく示している。その他の項目も、平均値の「順位」は概ね等しく、3 校の類似性を示している。

それぞれの専門学校の独自性を確認すると、先ず C 専門学校の 5.「資格取得に関わる準備・指導」の平均値 4.00 は、A 専門学校 3.58、B 専門学校 3.54 と比較すると際

立って高い値になっている。順位も2位となっており、A 専門学校7位、B 専門学校6位と大きく離れている。この点について、C 専門学校の教育責任者（校長）に確認したところ、C 専門学校では、在学中に取得する資格を学科毎に2～3 設定し、その取得指導を徹底して行っているとのことであった。未取得の学生に対しては、正規授業時間外（主に放課後）に対策授業を行うなどして指導を行っている。そうした学生の資格取得率が学科間の教育評価の指標にもなっている。他の2校ではそうした資格指導は行っていないため、その違いによるものと考えられる。

表 4 - 1 在学中に提供された教育についての充実度

No	提供した教育に関する項目	A 専門学校				B 専門学校				C 専門学校			
		平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数
1	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	3.04	10	1.17	219	2.99	11	1.17	72	3.00	9	1.16	231
2	知識を広げ教養を身につける授業	3.88	2	0.94	217	3.79	3	0.96	72	3.62	5	0.99	231
3	専門の授業（講義や実習）	4.38	1	0.81	216	4.39	1	0.64	71	4.06	1	0.92	230
4	仕事現場や地域での実習や就業経験	3.09	9	1.23	217	3.38	8	1.12	72	2.84	11	1.19	231
5	資格取得に関わる準備・指導	3.58	7	1.22	218	3.54	6	1.21	71	4.00	2	0.96	231
6	卒業論文、卒業制作、卒業発表	3.73	4	1.08	218	3.69	4	0.98	72	3.52	6	1.07	231
7	部活やサークル、学校の行事	2.99	11	1.24	220	3.19	9	1.15	72	2.86	10	1.16	231
8	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備	3.71	5	1.12	219	3.40	7	1.13	72	3.65	4	1.08	231
9	学習支援（学習の仕方や理解度の相談・支援）	3.70	6	1.01	220	3.58	5	0.94	72	3.48	7	0.99	230
10	就職支援（就職活動についての相談・支援）	3.81	3	1.10	219	3.86	2	1.11	72	3.71	3	0.97	231
11	生活についての相談	3.19	8	1.08	219	3.13	10	0.96	71	3.20	8	0.98	231

3校比較で、平均値の最も高い値に背景色を付けた。

B 専門学校の 4.「仕事現場や地域での実習や就業経験」の平均値 3.38 は、他の 2 校より、高めの値となっている。これは、今回の調査対象の内 2005 年卒業生は、ほぼ全員がインターンシップを経験しており、そのことによるものと考えられる。現在（2009 年・2013 年卒業生）は、他の 2 校同様希望者（内定先企業への早期入社研修を含む）のみの実施となっている。今後更に充実が期待されているインターンシップ

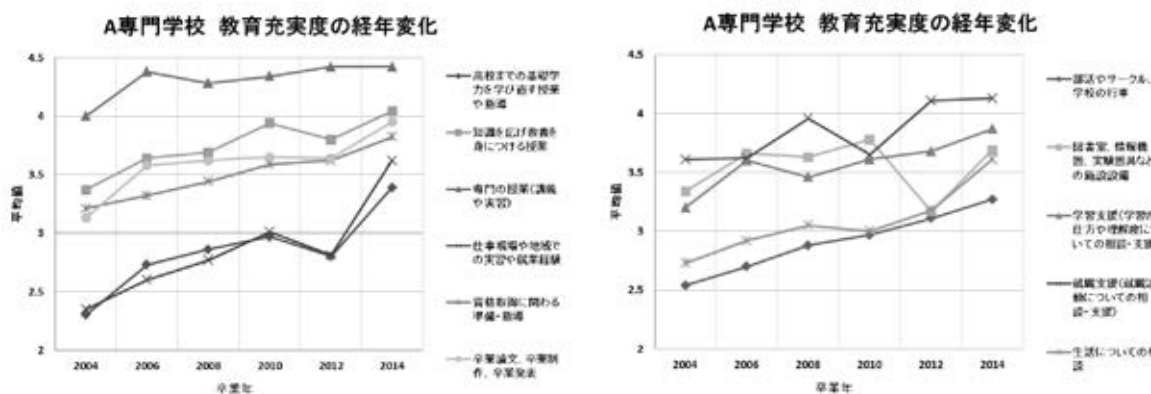
やサービス・ラーニングに象徴される、この 4.「仕事現場や地域での実習や就業経験」については、3校とも低い水準である。

3校ともに比較的上位にある 2.「知識を広げ教養を身につける授業」の具体的内容は、IT 関連の概論的授業や技術史、就職試験対策の一環としての一般常識や論文（作文）指導などが考えられる。3校ともに、大学の教養課程のような人文科学・社会科学や外国語などの教養科目は行っていない。

1.「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」についても3校とも低い順位である。高校までの学び直しは、大学の初年次教育で多く行われているリメディアル教育のような独立した科目としてではなく、各専門科目のなかで必要に応じて必要な量の「基礎学力の学び直し」が行われている。

3校の比較で、最も高い平均値を示す項目の数は、A 専門学校 5 項目、B 専門学校 4 項目、C 専門学校 2 項目となっている。C 専門学校の平均値は、最も低い値が 7 項目と多い。

図 4-1 は、A 専門学校の 2012 年 E Q 研による卒業生調査と今回（2015 年）の調査結果とを組み合わせた教育充実度（平均値）の経年変化を示すものである。



2004 年 n=76、2006 年 n=73、2008 年 n=100、2010 年 n=68、2012 年 n=111、2014 年 n=78

図 4-1 A 専門学校 教育充実度の経年変化

A 専門学校の 2012 年調査対象は、2004 年卒、2008 年卒、2012 年卒であり、今回（2015 年）の調査対象は、2006 年卒、2010 年卒、2014 年卒であることから、2004 年から 2014 年まで、2 年間隔で調査を行ったことになる。

図 4-1 左のグラフは、主に教育課程（科目内容や実習形態）に関する項目、右のグラフは学校生活を送るための各種相談や施設などの項目である。

図 4-1 より充実度に連続性を見出すことができ、各年の卒業生が適切に回答している様子が伺える。

全ての項目において、2004 年より 2014 年の方が高い充実度となっている。10 年の

間にA専門学校の「教育の充実度」は増したと捉えることができる。A専門学校によると、2004年から教育部門の体制が大きく変わり、教育の数値目標管理やFDの導入など教育改革がスタートした。そうした取組みの成果を裏付ける結果を示している。

専門学校教育の中心である「専門の授業（講義や実習）」については、他の項目と比較して、全ての年で最も高い値になっており、A専門学校が「専門の授業（講義や実習）」に注力していることが伺える。

「資格取得に関する指導」「部活やサークル、学校の行事」は、全ての年がその前の調査年を上回り、順調に伸びていることが確認できる。

その他の項目について、年毎の変動要因をA専門学校に確認し、以下に示す。

「知識を広げ教養を身につける授業」「仕事現場や地域での実習や就業体験」「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」の3項目は、2012年にその前後の年より低下している。これは、2011年の東日本大震災直後に約1ヶ月間授業がストップし、再開後も余裕のない授業運営を行ったことで、「専門の授業」以外の指導が十分に行えなかったことによる影響と考えられる。

また、「図書室、情報機器、実験器具など施設設備」の2012年の大きな落込みは、2010年～2012年にかけて行ったA専門学校の本館建替えにより、一部の施設が使用できなかったことによる影響と考えられる。

「就職支援（就職活動についての相談・支援）」の2010年の落込みは、リーマンショック後、最も就職が困難だった時期にあたり、就職支援の充実度の低下というより、結果になかなか結び付かなかったことによる影響と考えられる。

4. 2 在学期間中熱心に取組んだ事柄

表4-2は、卒業生自身が在学期間中に熱心に取組んだ項目についての調査である。

熱心に取組んだ項目として、主に教育課程に関する6項目と教育課程以外の部活やサークル活動、友人や教員との交流、アルバイト、就職活動など6項目で調査した。

熱心に取組んだ度合いを、5「熱心に取組んだ」～1「熱心に取組まなかった」までの5段階で回答を求めた。表4-2は、その「平均値」、平均値の序列を示す「順位」「標準偏差」「データ数」をまとめたものである。

3校ともに最も熱心に取組んだ項目は、3.「専門の授業（講義や実習）」である。2番目は、A専門学校、B専門学校は共通して2.「知識を広げ教養を身につける授業」であるが、C専門学校では9.「友人との交流」となっている。3番目以降の項目は、それぞれの専門学校毎に多少異なっているが、12.「就職活動」が上位にランクされている点や8.「部活やサークル、学校の行事」7.「海外研修や留学のための機会や指導」が下位にランクされている点など、3校の類似性が確認できる。

表4-1で際立っていたC専門学校の5.「資格取得に関わる準備・指導」の充実度

と同様に、C 専門学校の 5.「資格取得に関わる準備・指導」が 3 番目に熱心に取り組んだ項目となっている。他の 2 校と比較しても最も高い「平均値」となっており、C 専門学校の独自性を示している。

3 校を比較すると、平均値の最も高い値の項目は、A 専門学校：5 項目、B 専門学校：5 項目、C 専門学校：2 項目と、表 4 - 1 同様、C 専門学校の平均値の値が全体的に低い結果となっている。

表 4 - 2 在学中熱心に取り組んだこと

No	提供した教育に関する項目	A 専門学校				B 専門学校				C 専門学校			
		平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数
1	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	3.04	10	1.11	220	3.06	10	0.98	72	2.99	8	1.12	229
2	知識を広げ教養を身につける授業	3.94	2	0.85	219	3.90	2	0.95	72	3.60	6	1.11	229
3	専門の授業（講義や実習）	4.26	1	0.79	218	4.19	1	0.86	72	4.04	1	1.03	228
4	仕事現場や地域での実習や就業経験	3.25	9	1.17	217	3.36	7	1.23	72	3.01	7	1.09	229
5	資格取得に関わる準備・指導	3.44	6	1.25	218	3.79	5	1.05	72	3.86	3	1.14	229
6	卒業論文、卒業制作、卒業発表	3.71	5	1.10	219	3.67	6	1.13	72	3.64	5	1.13	228
7	海外研修や留学のための機会や指導	1.98	12	1.24	220	2.00	12	1.16	71	1.86	12	1.07	229
8	部活やサークル、学校の行事	2.81	11	1.34	219	2.83	11	1.35	72	2.66	11	1.30	227
9	友人との交流	3.94	3	1.12	219	3.86	4	1.04	72	4.03	2	1.05	230
10	授業外での教員との交流	3.31	7	1.27	219	3.14	8	1.28	71	2.85	9	1.26	228
11	アルバイト	3.30	8	1.44	219	3.13	9	1.46	72	2.78	10	1.50	230
12	就職活動	3.84	4	1.08	219	3.89	3	1.09	72	3.77	4	1.05	230

3 校比較で、平均値の最も高い値に背景色を付けた。

表 4 - 3 は、A 専門学校の在学中熱心に取り組んだことに関する、2012 年 EQ 研での卒業生調査との比較である。3 コーホートをまとめた結果の比較であるが、熱心に取り組んだ項目に関する序列は、多少の違いがあっても概ね等しい。平均値の値も高い値が 2015 年：5 項目、2012 年：7 項目と、調査年による偏りは確認できない。

最下位の項目である 7.「海外研修や留学のための機会や指導」は、平均値が 2012

年：2.69、2015 年：1.89 と開きがある。2004 年頃までは、海外研修に参加する学生は多くいたが、近年は減少しておりそうしたことの影響によるものと考えられる。

2012 年調査結果と合わせて、図 4-1「教育充実度の経年変化」と同様に 2004 年～2014 年の隔年について、熱心に取り組んだ項目に関する経年変化も確認したが、充実度のような連続性は見られなかった。

表 4-3 在学中熱心に取り組んだこと A 専門学校 2012 年調査との比較

No	提供した教育に関する項目	2015 年調査				2012 年調査				平均値の差 (a-b)
		平均値(a)	順位	標準偏差	データ数	平均値(b)	順位	標準偏差	データ数	
1	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	3.04	10	1.11	220	3.05	10	1.10	223	-0.01
2	知識を広げ教養を身につける授業	3.94	2	0.85	219	3.74	3	1.03	282	0.20
3	専門の授業(講義や実習)	4.26	1	0.79	218	4.16	1	0.95	289	0.10
4	仕事現場や地域での実習や就業経験	3.25	9	1.17	217	3.34	8	1.07	184	-0.09
5	資格取得に関わる準備・指導	3.44	6	1.25	218	3.51	6	1.22	263	-0.07
6	卒業論文、卒業制作、卒業発表	3.71	5	1.10	219	3.68	5	1.14	274	0.03
7	海外研修や留学のための機会や指導	1.98	12	1.24	220	2.69	12	1.21	105	-0.71
8	部活やサークル、学校の行事	2.81	11	1.34	219	3.02	11	1.20	243	-0.21
9	友人との交流	3.94	3	1.12	219	3.95	2	1.05	288	-0.01
10	授業外での教員との交流	3.31	7	1.27	219	3.13	9	1.22	262	0.18
11	アルバイト	3.30	8	1.44	219	3.41	7	1.28	217	-0.11
12	就職活動	3.84	4	1.08	219	3.69	4	1.14	282	0.15

平均値の高い側に背景色を付けた。

5章 専門学校教育の有用性（学習成果）と満足度

卒業後就業経験を経た上での専門学校教育に対する有用性について、次のような質問で調査を行った。

Q. 本校での在学中の経験は、以下の設問についてどれくらい重要でしたか？

1. 就職先を見つける上で
2. 仕事行う上での基礎的な能力を身につける上で

3. 一人前に仕事を行うための能力を身につける上で
4. 将来のキャリアを展望する上で
5. 卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で
6. 人間性（人格）を形成する上で

これらの各項目について、5「とても重要である」～1「全く重要でない」の5段階で回答を求めた。

それぞれの項目は、専門学校教育における学習成果（ラーニングアウトカム）であるとも考えられる。

3校のような、工業（情報・グラフィックデザイン・コンテンツ）分野の専門学校では、卒業時点に専攻分野を活かした企業への就職が第一義的な目標となっている。そして、多くの卒業生がそれを果たしているため、卒業時点で確認できる短期的な学習成果は、「就職先を見つけること」である。「出身の専門学校教育は、就職先を見つける上でとても重要であった。」という卒業生からの評価は、その専門学校の評価として分かり易く、募集広報的にも価値のある材料であろう。

高等教育機関における学習成果（ラーニングアウトカム）のカテゴリーを、①専攻（学習）分野における専門的知識・技能、②汎用的能力、③人格形成の3つとすると、本卒業生調査の有用性に関する2～6の各項目は、次のように分類できる。

【専攻（学習）分野に関する専門知識・技能】

3. 一人前に仕事を行うための能力を身につける上で

【汎用的能力】

2. 仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で
4. 将来のキャリアを展望する上で
5. 卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で

【人格形成】

6. 人間性（人格）を形成する上で

5. 1 専門学校教育の有用性と満足度の集計結果

表5-1は、3校の有用性に関する調査結果をまとめたものである。各設問の5段階の回答の「平均値」、平均値の序列示す「順位」「標準偏差」「データ数」を示している。

3校ともに、1.「就職先を見つける上で」と2.「仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で」が高い値となっている。専門学校の短期的な目標である「卒業時に学習内容を活かした就職」といった特徴をよく表している。

表 5 - 1 専門学校教育の有用性

No	専門学校教育の有用性	A 専門学校				B 専門学校				C 専門学校			
		平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数
1	就職先を見つける上で	3.91	1	1.01	220	3.93	1	0.90	72	3.61	2	0.98	231
2	仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で	3.91	1	0.96	217	3.75	2	0.93	71	3.66	1	0.94	231
3	一人前に仕事を行うための能力を身につける上で	3.59	4	1.09	219	3.40	5	0.98	72	3.33	5	0.96	230
4	将来のキャリアを展望する上で	3.58	5	1.10	218	3.45	4	1.02	71	3.32	6	0.96	231
5	卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で	3.80	3	0.94	219	3.72	3	0.92	72	3.61	2	0.94	230
6	人間性（人格）を形成する上で	3.34	6	1.10	217	3.40	5	1.01	72	3.35	4	1.11	230

最も高い平均値に背景色を付けた。

一方長期的な視点に立った 4.「将来のキャリアを展望する上で」や 6.「人間性（人格）を形成する上で」は、最下位かまたはそれに近い順位である。C 専門学校では 6.「人間性（人格）を形成する上で」は、4 番目の順位となっているが、最下位の 4.「将来のキャリアを展望する上で」とは、0.03 と僅かな差である。

吉本（2015）によると、2012 年 EQ 研による卒業生調査の結果では、6.「人間性（人格）を形成する上で」の平均値は、専門学校の工業（情報含む）では 3.20 と、2012 年 EQ 研卒業生調査を行った全ての分野で最も低い値である。同設問に対する専門学校全分野の平均は 3.50 で、有用性に関する項目のなかでは最下位となっている。保育・栄養・理美容といった国家資格取得の分野では 4.04 と高い水準となっている。また、調査に参加した短期大学全分野の平均値は 3.81 であり、専門学校全分野の平均より高い水準となっている。

3 校の比較では、2～5 までの項目は A 専門学校の平均値が最も高く、1、6 の項目は B 専門学校の値が最も高い。これまでの調査項目同様、C 専門学校の平均値は低い水準のことが多い。

表 5 - 2 は、「総合的に振返った自校に対する満足度」を 5「とても満足」～1「とても不満」で調査した結果である。5 段階の回答の「平均値」、専門学校間の平均値の序列示す「順位」「標準偏差」「データ数」を示している。

卒業生が在学期間中の教育や就業後の教育の有用性など、総合的な観点から判断した満足度として、B 専門学校が最も高い値となっている。

表 5 - 2 総合的に振返った自校に対する満足度

No	満足度	A 専門学校				B 専門学校				C 専門学校			
		平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数	平均値	順位	標準偏差	データ数
1	総合的に振返った自校に対する満足度	4.07	2	0.97	220	4.19	1	0.86	72	3.76	3	1.00	231

図 5 - 1 は、5 段階評価の内訳を示すものである。

A 専門学校は、雇用形態、就業先従業員数、年収、職場における評価など、多くの点で最も高い評価となっていたが、総合的に振返った満足度では、5「とても満足」と回答する人の割合はB専門学校の方が6ポイント以上高くなっている。C専門学校は、4「やや満足」以上の割合が69.3%と、他の2校より約10ポイント低い水準となっている。

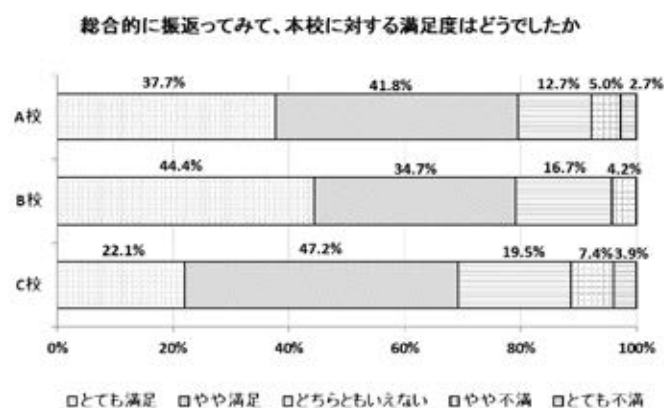


図 5 - 1 総合的に振返った自校に対する満足度

5. 2 専門学校教育の有用性に関する経年変化

表 5 - 3 は、A 専門学校の教育の有用性に関する経年変化を示す。有用性の「平均値」「標準偏差」「データ数」を示しており、更に 2014 年では有用性の平均値の「順位」、2010 年・2006 年では 2014 年平均値と各年平均値との差を示した。

有用性を経年で比較すると、卒業後 1 年目の平均値が多くの項目で最も高い値となっており、卒業後の経過年数に応じて減少していく傾向を示している。減少幅は、2. 「仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で」と 5. 「卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で」は比較的少なく、4. 「将来のキャリアを展望する上で」と 6. 「人間性（人格）を形成する上で」は多くなっている。

表 5 - 4 は、表 5 - 3 と同様の B・C 専門学校の集計結果である。この集計からも、卒業後 1 年目の平均値が多くの項目で最も高い値となっている。

表 5 - 3 A 専門学校の有用性に関する経年変化

No	専門学校教育の 有用性	2014 年				2010 年				2006 年			
		平均 値(a)	順位	標準 偏差	デー タ数	平均 値(b)	(b)-(a)	標準 偏差	デー タ数	平均 値(c)	(c)-(a)	標準 偏差	デー タ数
1	就職先を見つける上 で	4.01	1	0.96	76	3.83	-0.18	1.11	69	3.88	-0.13	0.97	75
2	仕事を行う上での基 礎的な能力を身につ ける上で	3.95	2	0.90	75	3.81	-0.14	1.07	68	3.97	0.02	0.92	74
3	一人前に仕事を行う ための能力を身につ ける上で	3.76	4	1.01	75	3.39	-0.37	1.18	69	3.60	-0.16	1.07	75
4	将来のキャリアを展 望する上で	3.74	5	1.05	74	3.43	-0.31	1.19	69	3.56	-0.18	1.06	75
5	卒業後、仕事に必要 な学習を続けていく 上で	3.88	3	0.90	75	3.77	-0.11	1.03	69	3.76	-0.12	0.91	75
6	人間性（人格）を形 成する上で	3.53	6	1.06	74	3.16	-0.37	1.13	68	3.32	-0.21	1.09	75

最も高い平均値に背景色を付けた。

有用性の内、2.「仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で」以外は、平均値の値は 2014 年＞2010 年＞2006 年と、卒業後の経過年数に応じて、低下していく傾向が確認できる。A 専門学校の結果も含め、3 校の教育の有用性は、卒業後の経過年数に応じて低下していくことが確認できる。

表 5 - 4 B・C 専門学校の有用性に関する経年変化

No	専門学校教育の 有用性	2014 年				2010 年				2006 年			
		平均 値(a)	順位	標準 偏差	デー タ数	平均 値(b)	(b)-(a)	標準 偏差	デー タ数	平均 値(c)	(c)-(a)	標準 偏差	デー タ数
1	就職先を見つける上 で	3.85	1	0.89	84	3.72	-0.13	1.02	118	3.51	-0.34	0.95	101
2	仕事を行う上での基 礎的な能力を身につ ける上で	3.73	2	0.99	84	3.75	0.02	0.96	118	3.57	-0.16	0.86	100
3	一人前に仕事を行う ための能力を身につ ける上で	3.43	5	1.02	84	3.39	-0.04	0.97	117	3.24	-0.19	0.90	101
4	将来のキャリアを展 望する上で	3.51	4	0.97	84	3.39	-0.12	1.02	118	3.16	-0.35	0.89	100
5	卒業後、仕事に必要 な学習を続けていく 上で	3.70	3	0.94	84	3.66	-0.04	0.97	117	3.56	-0.14	0.88	101
6	人間性（人格）を形 成する上で	3.48	6	1.11	84	3.44	-0.04	1.07	117	3.19	-0.29	1.06	101

最も高い平均値に背景色を付けた。

有用性の減少幅は、A 専門学校の集計結果と同様、2.「仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で」と 5.「卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で」は比較的少なく、4.「将来のキャリアを展望する上で」と 6.「人間性（人格）を形成する上で」は多くなっている。

他の学校種における教育の有用性は、短期大学では卒業後の経過年数に応じて低下していき、四年制大学では逆に増加していく傾向を示すことが、吉本（2007）によって次のように示されている。

「注目点の第一は、どの領域でも短大卒業後の年数を経ると効用評価が下がっていることである。これは著者が別途調査した 4 年制大卒の傾向とは全く逆である。」

3 専門学校の教育の有用性の経年変化は、短期大学と同様の傾向を示している。

5. 3 満足度の経年変化

図 5 - 2 は「総合的に振り返った満足度」を、卒業年毎に集計したものである。

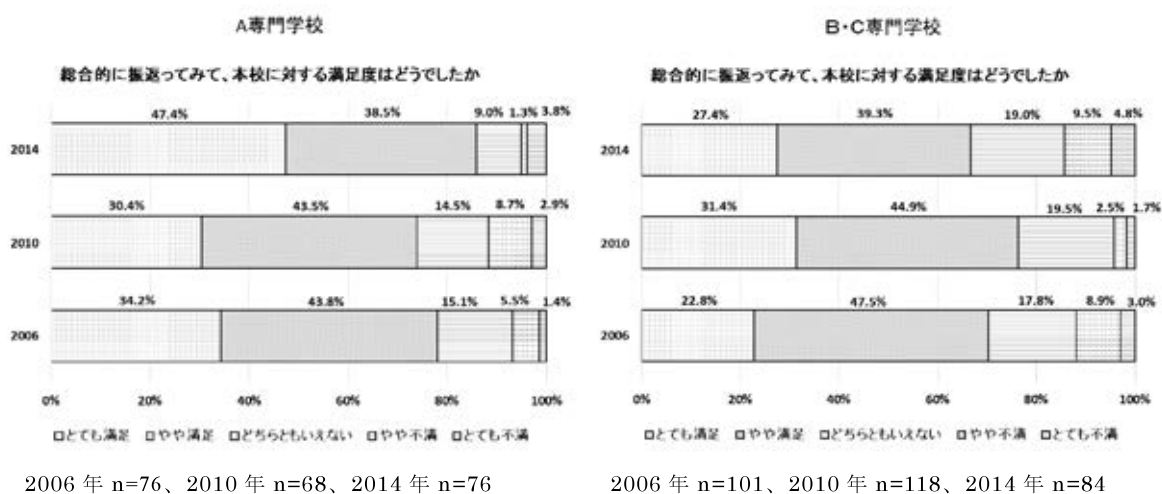


図 5 - 2 満足度の経年変化

A 専門学校、B・C 専門学校の集計共に、「とても満足」「やや満足」を合わせると、全ての卒業年で 6 割以上の方が満足と回答しており、「やや不満」「とても不満」と回答する人の割合は低い。

「とても満足」「やや満足」の合計に着目すると、A 専門学校では卒業後 1 年目（2014 年）が最も高く、卒業後 5 年目（2010 年）が最も低い。逆に B・C 専門学校の集計では、5 年目（2010 年）が最も高く、1 年目（2014 年）が最も低くなっているなど、両者の経年変化に共通した傾向は見られない。

6章 初期キャリアと教育プロセスとの関係

専門学校卒業生の多くが在学中に専攻（学習）した分野に就職し、様々な就業経験を経て社会人としての初期キャリアを築いていく。この過程で重要な役割を果たす専門学校教育の「有用性（学習成果）」が、在学期間中の何によって形成されるのか、その規定因子を見出すことにより、初期キャリアと教育プロセスとの関係を探った。

また、初期キャリアを含め全てを包含する「総合的に振返った満足度」の規定因子も合わせて分析した。

図6-1は、初期キャリアと教育プロセスとの関係を分析するモデルである。初期キャリアを形成する上で重要な「専門学校教育の有用性」（表5-1）の各項目と「総合的に振返った満足度」（表5-2）を目的変数とし、在学期間中の教育プロセスとして「教育の充実度」（表4-1）の各種項目と「在学期間中熱心に取り組んだこと」（表4-2）の各種項目、および学習状況として「授業以外の学習時間」「成績」を説明変数として、重回帰分析を行った。

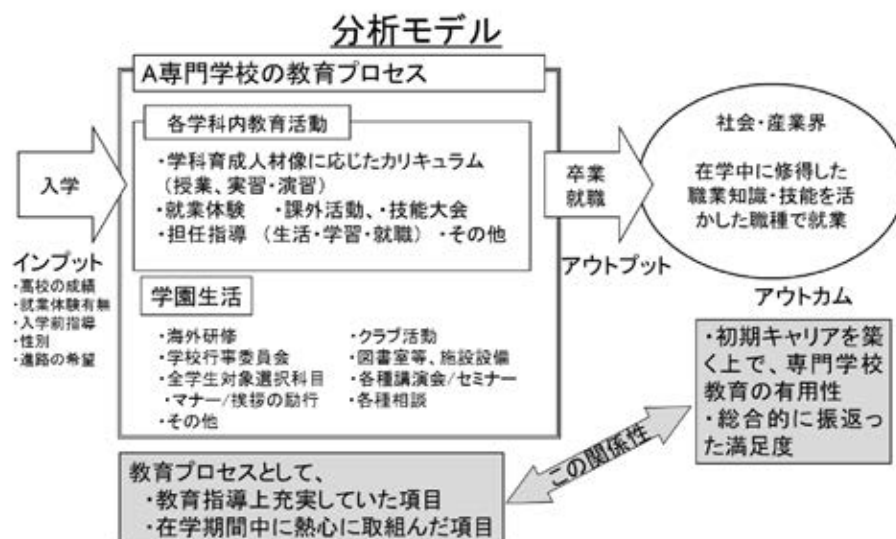


図6-1 教育プロセスと就業後の有用性・満足度 分析モデル

分析時の説明変数の選択方法として、多重共線性の影響を軽減し説明力（補正済み R^2 ）を向上させるために変数増減法を用いた。

分析はデータ数に対する説明変数の数のバランスを考慮して、「教育の充実度」を中心とする説明変数の組合せと、「在学中熱心に取り組んだこと」を中心とする説明変数の組合せの2通りとした。

今回（2015年）の卒業生調査のA専門学校データ（ $n=220$ ）による分析、A専門学校の2015年データと2012年卒業生調査データを合わせた（ $n=520$ ）分析、3校の2015年の全データおよびA・B校の2012年卒業生調査のデータを全て合わせた（ $n=1009$ ）分析の3通り行い、データ数の変化に応じた規定因子の状況も確認した。

6. 1 学校側が提供した教育の充実度と満足度・有用性との関係

表 6 - 1 は、A 専門学校の「在学中に提供された教育についての充実度」を中心とする重回帰分析の結果である。この表は、「満足度」を目的変数とする分析、有用性の 6 つの各項目を目的変数とする分析と合わせて、7 重回帰分析を行った結果である。

表内の数値は、標準偏回帰係数であり、数値に付随している*は、検定の結果を示している。

分析結果より、満足度の規定因子として、「在学中の成績」「専門の授業（講義や実習）」「就職支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）」の 3 項目となっている。補正済み R^2 が 0.463 となっており、A 専門学校の満足度を先の 3 つの規定因子によって、46.3%説明していることを示している。規定因子のなかで、「就職支援」が 0.410 と最も大きい値となっている。規定因子の値が大きいということは、他の因子と比較して満足度に対する影響が大きいことを示している。この場合、就職支援をより充実

表 6 - 1 A 専門学校 教育充実度と満足度・有用性との関係（n=220）

説明変数名		満足度	有用性					
			就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	将来のキャリアを展望する上で	仕事に必要な学習を続けていく上で	人格を形成していく上で
学業	授業以外の学習時間							
	在学中の成績	0.103*						
教育指導の充実度合い	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導							0.245***
	知識を広げ教養を身につける授業						0.153*	
	専門の授業（講義や実習）	0.393***		0.264***	0.246***	0.289***	0.235**	
	仕事現場や地域での実習や就業経験							
	資格取得に関わる準備・指導				0.158*			
	卒業論文、卒業制作、卒業発表		0.133*		0.178**		0.145*	
	部活やサークル、学校の行事							
	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備							
	学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）		0.223**	0.233**		0.239**	0.196**	0.347***
	就職支援（就職活動についての相談・支援）	0.410***	0.349***					
	生活についての相談			0.153*	0.204**	0.226**		
補正済み R^2		0.463	0.334	0.265	0.323	0.356	0.302	0.240
データ内訳	2006 年	2010 年	2014 年	合計				
A 専門学校	76	68	76	220				

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

させれば高い満足度を得られることになるが、逆にそれを怠れば満足度も大きく低下することになる。

有用性に関する各項目も、それぞれ 2～4 の説明変数が規定因子となっていることが

確認できる。

表 6 - 1 全体より、説明変数の「専門の授業」「学習支援」は、満足度・有用性の複数の項目にわたって、規定因子となっている。カリキュラムの大半を「専門の授業」が占め、クラス担任による学生個々への「学習支援」を行うといった専門学校教育を象徴した結果ともいえる。この項目をより充実させることが、教育改善に効果的であることを示している。表 6 - 1 は、A 専門学校の 2015 年卒業生調査に回答した 220 名に関する結果であって、ここから一般化を図ることはデータ数としては乏しい。

教育の充実度や有用性に関する調査結果は、2012 年卒業生調査の結果と類似しているため、それらを合わせてより多くのデータを用いて分析を試みた。

表 6 - 2 は、A 専門学校の 2012 年および 2015 年卒業生調査のデータを合わせて (n =520)、重回帰分析を行った結果である。

表 6 - 2 A 専門学校 教育充実度と満足度・有用性との関係 (n =520)

説明変数名		満足度	有用性					
			就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	将来のキャリアを展望する上で	仕事に必要な学習を続けていく上で	人格を形成していく上で
学業	授業以外の学習時間		0.102*		0.105**	0.100*	0.150***	
	在学中の成績	0.097**		0.156***				
教育指導の充実度合い	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導							0.114*
	知識を広げ教養を身につける授業	0.111**		0.100*			0.114*	0.213***
	専門の授業(講義や実習)	0.315***	0.113*	0.234***	0.216***	0.161***	0.255***	
	仕事現場や地域での実習や就業経験				0.193***	0.107*	0.115**	
	資格取得に関わる準備・指導		0.093*		0.093*	0.199***		
	卒業論文、卒業制作、卒業発表			0.136**			0.125**	
	部活やサークル、学校の行事							
	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備							
	学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)	0.159***			0.127*	0.144**		0.174**
	就職支援(就職活動についての相談・支援)	0.257***	0.403***	0.224***			0.140**	
	生活についての相談							0.160**
補正済みR ²		0.453	0.280	0.315	0.286	0.285	0.332	0.249
データ内訳		2004 年	2006 年	2008 年	2010 年	2012 年	2014 年	合計
A 専門学校		89	76	100	68	111	76	520

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

2015 年卒業生調査のデータ (n =220) による結果との大きな違いは、得られた規定因子 (有意な水準の標準偏回帰係数) の多さである。表 6 - 1 では、満足度および 6 つの有用性を規定する因子は合計 22 個であったのに対して、今回の結果では 34 個の規定因子が得られた。データ数が倍以上になり、「教育プロセス」と卒業後の満足度や有用性との関係がより鮮明になった。

「授業以外での学習時間」は、表 6 - 1（2015 年卒業生調査データ）の結果からは見出せなかった規定因子である。授業時間以外に、自ら進んで学習する時間を多く持つことが、有用性の「仕事で一人前になる」「仕事に必要な学習を継続する」などにプラスに働くことを示している。同様に、「仕事現場や地域での実習や就業経験」も新たな規定因子である。これは、インターンシップのような授業形態のことであり、その充実「仕事で一人前になる」「将来のキャリアを展望する」「仕事に必要な学習を継続する」などにプラスに働くことを示している。

表 6 - 1 の結果と同様、「専門の授業」「学習支援」は複数の項目の規定因子となっている。加えて「就職支援」も満足度と 3 つの有用性の規定因子となっている。有用性のなかでも、「就職先を見つける上で」は、「就職支援」と直接つながる関係であるため、0.403 と表 6 - 2 のなかで最も大きな値となっている。

表 6 - 3 は、2015 年卒業生調査の 3 校のデータと 2012 年卒業生調査の A 専門学校および B 専門学校のデータを合わせて（n=1009）分析を行った結果である。

表 6 - 3 3 校 教育充実度と満足度・有用性との関係（n=1009）

説明変数名						満足度	有用性						
							就職先を見つける 上で	仕事に必要な基礎 を身につける上で	仕事で一人前になる 上で	将来のキャリアを 展望する上で	仕事に必要な学習 を続けていく上で	人格を形成していく 上で	
専門学校ダミー	B専門学校：1 他2校：0					0.063**							0.065*
	C専門学校：1 他2校：0						-0.156***	-0.055*		-0.064*			0.079*
学業	授業以外での学習時間						0.055	0.086**	0.094**	0.080**	0.174***	0.091**	
	在学中の成績					0.084**	0.065*	0.121***					
教育指導の 充実度合い	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導								0.076*	0.098**			0.104**
	知識を広げ教養を身につける授業					0.118***		0.115**	0.080*	0.075*	0.134***	0.178***	
	専門の授業(講義や実習)					0.277***	0.112**	0.160***	0.118**	0.088*	0.149***		
	仕事現場や地域での実習や就業経験								0.161***	0.083*	0.068*	0.085*	
	資格取得に関わる準備・指導						0.146***		0.075*	0.157***	0.101**		
	卒業論文、卒業制作、卒業発表					0.093**		0.078*	0.071*		0.094**	0.087*	
	部活やサークル、学校の行事					0.092**							
	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備												
	学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)					0.156***	0.081*	0.137***	0.164***	0.143***	0.157***	0.094*	
	就職支援(就職活動についての相談・支援)					0.158***	0.293***	0.157***					
生活についての相談									0.090*			0.119**	
補正済みR ²						0.452	0.300	0.309	0.285	0.270	0.310	0.254	

データ内訳	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	合計
A 専門学校		89		76		100		68		111		76	520
B 専門学校	49		17		66		33		71		22		258
C 専門学校				84				85				62	231
合計	138		17	160	166		33	153		182	22	138	1009

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

3つの専門学校には、類似性と独自性がある。独自性による違いを明らかにするために、説明変数に専門学校ダミーの項目を追加した。A 専門学校を基準として、B 専門学校・C 専門学校との違いを示すため、ダミー変数はB 専門学校とC 専門学校の2校分となる。

分析結果より満足度と6つの各有用性について、専門学校ダミー変数を除き、49個の規定因子が得られた。整理すると、表6-1 (n=220) : 22個、表6-2 (n=520) : 34個、表6-3 (n=1009) : 49個となり、データ数の増加に応じて得られる規定因子も増加している。

「満足度」は、8つの規定因子によって構成されている。最も大きい値は、「専門の授業」で、続いて大きい順に「就職支援」「学習支援」「知識を広げ教養を身につける授業」となっている。この順は、表6-2でも同様の傾向がみられたが、新たに「卒業論文、卒業制作、卒業発表」「部活やサークル、学校行事」が満足度の規定因子であることが分かった。専門学校ダミーB 専門学校が0.063と小さな値ではあるが、規定因子となっている。これは、B 専門学校が他の2校に対して、「満足度」の点で優位であることを示している。表5-2「総合的に振返った自校に対する満足度」でB 専門学校の満足度が最も高い点からも、この結果は裏付けられる。

「有用性」の各項目について、以下に記述する。

①就職先を見つける上で

「就職支援」が最も大きい値の規定因子である。在学期間中の就職活動に対する支援なので、当然の結果であろう。次に「資格取得に関わる準備・指導」となっているが、これは資格取得が就職活動に有利に働くことを裏付けている。次に「専門の授業」と続いている。専門学校ダミーのC 専門学校が-0.156とマイナスの値となっている。回帰係数がマイナスの場合、説明変数の値をプラスに作用すると、結果がマイナスに作用することを示している。つまり、ここではC 専門学校の学生であることは、少なくとも他の2校より、「就職先を見つける上で」劣っていることを示している。非正規雇用や専攻分野以外への就職の割合の多さ、その他の項目でC 専門学校が他の2校より劣っていた点などからも、この結果は妥当性があるといえるであろう。

②仕事に必要な基礎を身につける上で

「専門の授業」が最も大きな値の規定因子となっている。次が、ほぼ同程度の値の「就職支援」である。仕事に必要な基礎とは、単に専門に関する基礎だけではなく、社会人としての基礎とも捉えることができる。在学期間中に、社会人としての基礎である話し方やビジネスマナーなどは、主に就職指導の一環として教育されている。結果は、そういった背景を示している。ここでも、専門学校ダミーのC 専門学校が-0.055となっている。仕事に必要な基礎を身につける上でも、C 専門学校の学生であることは、他の2校よりもマイナスであることを示している。

③仕事で一人前になる上で

この項目の最も大きな値の規定因子は「学習支援」であるが、次に大きな値として「仕事現場や地域での実習や就業経験」となっている。これは、インターンシップのような授業形態を示すものである。「仕事で一人前になる」という初期キャリアを築く上で最も重要ともいえることに、在学中の就業経験が影響していることを示している。また、「授業以外での学習時間」も規定因子となっており、自発的な学習行動が「一人前になる」という自立性を養うことに貢献している。

④将来のキャリアを展望する上で

この項目では、「資格取得に関わる準備・指導」「学習支援」の2つが比較的大きな値の規定因子となっており、その他の規定因子は何れも小さな値である。資格取得や学習方法の習得は、専門知識・技能の習得以上に、長期的なキャリアを展望する上でプラスに働くことを示している。この項目でも、専門学校ダミーC 専門学校は - 0.064 とマイナスになっており、将来のキャリアを展望する上で、C 専門学校は他の2校よりも劣る結果となっている。

⑤仕事に必要な学習を続けていく上で

この項目では、「授業以外での学習時間」が最も大きな値の規定因子となっている。就業後の学習は、在学期間中のような教員の指導による学習とは異なり、自発的なものである。在学期間中の授業以外での学習も、学生各自が計画した自発的な場合が多く、自立性や学習習慣を養うことに貢献している。

次に大きな値が「学習支援」となっており、学習方法の習得や自発的な学習が、卒業後の継続的な学習に貢献していることを示す結果である。

⑥人格を形成していく上で

「知識を広げ教養を学び直す授業」が最も大きな値の規定因子である。「専門の授業」は規定因子から外れており、人格を形成する上では、高い専門性より幅広い教養の方が貢献するといった結果である。また、「生活についての相談」が次に大きな値となっており、これも就職指導や学習指導より生活面の指導の方が人格形成には寄与するといったことを示している。

興味深いことに、専門学校ダミーB 専門学校・C 専門学校が、共にプラスの値となっている。これは、A 専門学校に対して、B 専門学校および C 専門学校が人格を形成する上では、優位であることを示している。

6. 2 在学期間中熱心に取り組んだ事柄と満足度・有用性との関係

表 6 - 4 は、今回（2015 年）の卒業生調査 A 専門学校のデータ（n=220）による説明変数「在学中熱心に取り組んだこと」を中心とする重回帰分析結果である。

満足度と 6 つの有用性について、19 個の規定因子が得られた。表 6 - 1 と比較して、

補正済み R^2 の値がどれも小さく、説明力が低い結果となっている。

「授業外での教員との交流」「仕事現場や地域での実習や就業経験」が、多くの項目の規定因子となっている。

今回の調査で A 専門学校の卒業生が在学期間中熱心に取り組んだことは、表 4 - 2 より「専門の授業」「知識を広げ教養を身につける授業」「友人との交流」が上位であり、「授業外での教員との交流」は 12 項目中 7 番目であった。満足度や有用性については、この教員との交流が最も多くの項目の規定因子となっている。熱心に取り組んだ項目としての順位は低い、教員との交流は満足度や有用性に対して影響が大きいことを示している。

表 6 - 4 A 専門学校 熱心に取り組んだことと満足度・有用性との関係 (n=220)

説明変数名		満足度	有用性					
			就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	将来のキャリアを展望する上で	仕事に必要な学習を続けていく上で	人格を形成していく上で
学業	授業以外での学習時間							
	在学中の成績							
在学中熱心に取り組んだこと	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導							
	知識を広げ教養を身につける授業							
	専門の授業(講義や実習)	0.214**				0.167**	0.251***	
	仕事現場や地域での実習や就業経験		0.157*		0.214**	0.196**	0.152*	
	資格取得に関わる準備・指導			0.207**				
	卒業論文、卒業制作、卒業発表			0.187**	0.169*			0.174*
	海外研修や留学のための機会や指導							0.171*
	部活やサークル、学校の行事							
	友達との交流							
	授業外での教員との交流	0.354***	0.142*		0.215**	0.294***	0.249***	0.262***
	アルバイト							
	就職活動		0.183**					
補正済み R^2		0.184	0.118	0.091	0.202	0.215	0.202	0.198
データ内訳	2006 年	2010 年	2014 年	合計				
A 専門学校	76	68	76	220				

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

表 6 - 5 は、表 6 - 2 同様 A 専門学校の 2012 年および 2015 年卒業生調査のデータを合わせて (n=520)、重回帰分析を行った結果である。

教育の充実度による分析と同様、表 6 - 4 の分析結果より多く 31 個の規定因子が得られた。

また、補正済み R^2 も、「満足度」「就職先を見つける上で」「仕事に必要な基礎を身につける上で」「仕事に必要な学習を続けていく上で」「人格を形成していく上で」は、

大きくなっており、説明力が向上している。特に、「仕事に必要な基礎を身につける上で」は、表 6 - 4 では「資格取得に関わる準備・指導」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」の 2 つが規定因子で補正済み R^2 は 0.091 であったが、表 6 - 5 では、「知識を広げ教養を身につける授業」「専門の授業」「友人との交流」「就職活動」の 4 つが規定因子となり、補正済み R^2 も 0.195 と倍以上になっている。

全体を俯瞰すると「授業外での教員との交流」「専門の授業」が多くの項目の規定因子になっており、表 6 - 4 と同様の傾向を示している。この分析では、新たに「知識を広げ教養を身につける授業」が多くの項目の規定因子になっていることが分かった。

表 6 - 5 A 専門学校 熱心に取り組んだことと満足度・有用性との関係 (n=520)

説明変数名		満足度	有用性					
			就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	将来のキャリアを展望する上で	仕事に必要な学習を続けていく上で	人格を形成していく上で
学業	授業以外での学習時間						0.090*	
	在学中の成績							-0.096*
在学中熱心に取り組んだこと	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導							0.107*
	知識を広げ教養を身につける授業	0.213***		0.190***	0.109*	0.168***	0.227***	0.216***
	専門の授業(講義や実習)	0.171***	0.130**	0.208***	0.160**		0.143**	
	仕事現場や地域での実習や就業経験				0.179***	0.132**		
	資格取得に関わる準備・指導					0.197***		
	卒業論文、卒業制作、卒業発表							
	海外研修や留学のための機会や指導		-0.096*					
	部活やサークル、学校の行事							0.144**
	友達との交流	0.150**	0.107*	0.110*			0.124**	
	授業外での教員との交流	0.184***			0.140**	0.173***	0.105*	0.149**
	アルバイト							
	就職活動		0.279***	0.110*	0.100*			
補正済み R^2		0.251	0.149	0.195	0.196	0.196	0.214	0.215
データ内訳	2004 年	2006 年	2008 年	2010 年	2012 年	2014 年	合計	
A 専門学校	89	76	100	68	111	76	520	

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

表 6 - 6 は、表 6 - 3 と同様に、2015 年卒業生調査の 3 校のデータと 2012 年卒業生調査の A 専門学校および B 専門学校のデータを合わせて分析を行った結果である。

説明変数の専門学校ダミーは、表 6 - 3 と同様である。

全体を俯瞰すると、「知識を広げ教養を身につける授業」と「授業外での教員との交流」が多くの項目の規定因子となっていることが分かる。補正済み R^2 の値は、何れも表 6 - 3 と比較すると低い値となっており、説明力が低いことを示している。5%以下の検定の結果得られた標準偏回帰係数の数も、専門学校ダミー変数を除き 36 個と表 6

- 3 (49 個) と比較して、13 個少ない結果となっている。「在学期間中に熱心に取り組んだこと」と「満足度」「有用性」との関係は、「在学期間中の充実度」と「満足度」「有用性」との関係より、相関が低い（関係が薄い）ものであるとも考えられる。

表 6 - 6 3 校 熱心に取り組んだことと満足度・有用性との関係 (n=1009)

説明変数名					満足度	有用性							
						就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	将来のキャリアを展望する上で	仕事に必要な学習を続けていく上で	人格を形成していく上で		
専門学校ダミー	B専門学校:1 他2校:0				0.078**								
	C専門学校:1 他2校:0					-0.174***	-0.099**		-0.072*				
学業	授業以外での学習時間								0.075*		0.104**		
	在学中の成績											-0.111***	
在学中熱心に取り組んだこと	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導									0.097**		0.101**	
	知識を広げ教養を身につける授業				0.154***		0.166***	0.186***	0.141***	0.184***	0.194***		
	専門の授業(講義や実習)				0.172***	0.167***	0.219***			0.137***			
	仕事現場や地域での実習や就業経験							0.123***					
	資格取得に関わる準備・指導								0.125***				
	卒業論文、卒業制作、卒業発表				0.073*			0.084*	0.093**	0.104**	0.119***		
	海外研修や留学のための機会や指導												
	部活やサークル、学校の行事										0.082*		
	友達との交流				0.148***	0.097**					0.067*		
	授業外での教員との交流				0.180***		0.113***	0.162***	0.196***	0.17***	0.201***		
	アルバイト							0.069*	0.068*				
就職活動					0.217***	0.114***							
補正済みR ² *					0.255	0.160	0.213	0.185	0.193	0.223	0.227		
データ内訳	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	合計
A 専門学校		89		76		100		68		111		76	520
B 専門学校	49		17		66		33		71		22		258
C 専門学校				84				85				62	231
合計	138		17	160		166	33	153		182	22	138	1009

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

表 6 - 6 の結果より、満足度は、専門学校ダミーB 専門学校を含め、6 つの規定因子からなっている。補正済み R² が 0.255 となっているため、この 6 つの規定因子で、満足度の 25.5% を説明していることになる。「授業外での教員との交流」が、最も大きい規定因子となっている。これは、表 6 - 4、表 6 - 5 と共通した結果である。専門の授業や教養を身につける授業など、学校が提供した授業以上に、教員との交流を熱心に行うことが、満足度に影響することを示している。また、「友人との交流」も満足度の規定因子となっている。学生生活における人的交流は学校への満足度に大きく影響しているという結果である。専門学校ダミーB 専門学校が正の値となっており、先の教育充実度と満足度との関係同様、B 専門学校は他の 2 校に対して、満足度の点で優れていることを示している。

「有用性」の各項目について、以下に記述する。

①就職先を見つける上で

この項目では、やはり「就職活動」が最も大きな値となっている。「友人との交流」も小さい値ではあるが規定因子となっている。就職先を見つける上で、友人との情報交換や共に就職活動するといったことが関係していることを示す結果である。

また、専門学校ダミーC 専門学校が負の値となっている。これは、就職先を見つける上で、C 専門学校は他の2校より劣っている事を示している。

②仕事に必要な基礎を身につける上で

この項目では、「専門の授業（講義や演習）」や「知識を広げ教養を身につける授業」が大きな値の規定因子となっている。これらに加えて、「授業外での教員との交流」も影響していることを示している。ここでも、C 専門学校は他の2校より劣っている結果となっている。

③仕事で一人前になる上で

最も大きな規定因子は、「知識を広げ教養を身につける授業」であり、「専門の授業」は、規定因子から外れている。その反面「仕事現場や地域での実習や就業体験」「アルバイト」といった実際の就業を伴うものや、「授業外での学習時間」といった自発的な学習が、この規定因子となっている。仕事で一人前になるためには、通常の授業の受講といった受動的なものより、就業を伴う授業形態や自発的な学習に熱心に取り組む方が、貢献するという結果である。

④将来のキャリアを展望する上で

「授業外での教員との交流」が最も大きな値となっており、長期的なキャリアを展望する上で、教員との非公式な交流が影響していることを示している。「知識を広げ教養を身につける授業」が次に大きな値となっており、幅広い知識や教養の重要性も示している。

⑤仕事に必要な学習を続けていく上で

他の項目と同様、「知識を広げ教養を身につける授業」や「授業外での教員との交流」が、大きな値の規定因子となっているが、特徴的なことは、「授業以外での学習時間」が規定因子となっている点である。これも、表6-3の結果と同様であるが、卒業後の学習継続には、在学期間中の自発的な学習行動が貢献していることを示している。

⑥人格を形成していく上で

この項目では、「授業外での教員との交流」や「知識を広げ教養を身につける授業」が大きな値の規定因子となっている。また、「部活やサークル、学校行事」「友人との交流」といった項目も、それらを熱心に行うことが人格形成にプラスに働くことを示している。

「在学中の成績」がマイナスの値となっており、専門学校の教育課程の大半を占め

る専門科目（講義や実習）で良い成績を収めることが、人格形成にはマイナスになるという結果を示している。

重回帰分析の結果として、回帰係数の極性が異なる通常では考えにくい結果となる場合がある。これは多くの場合、説明変数間の相関が深いことによって生じる多重共線性の影響によるものである。「在学中の成績」と「人格を形成していく上で」の単相関係数を求めたところ、0.016 と大変小さな値ではあるが正の値となった。本稿での重回帰分析では、多重共線性の影響を抑えるために、説明変数の選択法として変数増減法を用いているが、ここでの結果は他の説明変数の影響を受けた結果であるとも考えられる。更なる調査が必要であろう。

6. 3 満足度の規定因子

前節では「満足度」「有用性」を規定する因子を、在学期間中の教育プロセスに限定し、その説明変数のなかから見出した。分析結果のなかで、補正済み R^2 が最も大きかった「満足度」に着眼し、説明変数の対象範囲を広げて更に分析を行う。

吉本（2010）は、短期大学の教育の有用性について、教育の一連の流れである「インプット」「プロセス」「アウトプット」の各段階における説明変数を設定し、段階（ステップ）毎に重回帰分析を行い、「有用性（アウトカム）」を規定する因子を示した。

ここでは、専門学校教育の「有用性（アウトカム）」を含めて、卒業生の自校に対する「総合的に振り返った満足度」を規定する因子を段階（ステップ）毎に分析する。

説明変数の範囲を、学生が専門学校に入学する時点の「インプット」、在学期間中の教育「プロセス」、卒業時点の「アウトプット」、卒業後数年経た時点の「アウトカム」に広げて設定した。分析データは、2012 年と 2015 年卒業生調査を合わせた 3 校の全データ（ $n=1009$ ）を用いた。

「インプット」の説明変数としては、性別（ダミー）、入学年の違いを示す卒業後からの経過年数（数量）、どの専門学校に入学したか（ダミー）、第一志望であったのか（ダミー）とした。

「プロセス」の説明変数の項目は、在学中の教育の充実度を示す 10 項目（数量）と在学中に熱心に取り組んだ 6 項目（数量）の 2 つのカテゴリーを設定した。教育の充実度は、「高校までの基礎を学び直す授業や指導」「専門の授業（講義や実習）」「卒業論文、卒業制作、卒業発表など」の教育課程に関する 6 項目と「図書室、実習機器、実験機器などの施設設備」「就職支援（就職活動の相談・支援）」など、教育課程外の 4 項目からなる。熱心に取り組んだ項目は、教育課程以外の項目で「部活やサークル、学校行事」「アルバイト」「就職活動」などの項目に「授業外学習時間」を加えた。

「アウトプット」としては、「学業成績」（数量）「卒業直後の就業形態」（ダミー）「初職の専攻（学習）分野との関連性」（ダミー）とした。

「アウトカム」としては、現在のキャリアを示す 7 項目と専門学校教育の有用性を示す 6 項目の 2 つのカテゴリーを設定した。

それらを「インプット」から「アウトカム」まで、7 段階のステップに分けて、重回帰分析を行った結果が表 6 - 7 である。

表 6 - 7 総合的に振返った本校に対する満足度 ステップ別重回帰分析

「総合的に振返った本校に対する満足度」のステップ別規定因子(標準偏回帰係数) n=1009									
説明変数			①入学時	②:①+教育充実度(教育課程)	③:②+教育充実度(教育課程+その他)	④:③+在学中熱心に取組んだ	⑤:④+卒業時の到達度	⑥:⑤+現在のキャリア	⑦:⑥+専門学校教育の有用性
インプット	入学時	性別							
		卒業後経過年数	-0.097**						
		B専門学校		0.077**	0.063*	0.073**	0.068**	0.070**	0.059*
		C専門学校	-0.068*						
		本校が第一志望	0.133***	0.060*	0.055*	0.070**	0.061*	0.082**	0.072**
プロセス	教育充実度(教育課程)	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導知識を広げ教養を身につける授業						0.096**	
		専門の授業(講義や実習)		0.147***	0.110***	0.101**	0.108***		
		仕事現場や地域での実習や就業経験		0.343***	0.296***	0.279***	0.277***	0.296***	0.247***
		資格取得に関わる準備・指導		0.073*					
		卒業論文、卒業制作、卒業発表など		0.100***					
				0.166***	0.114***	0.091**	0.090**	0.093**	
	教育充実度(その他)	図書室、実習機器、実験機器などの施設設備							
		学習支援(学習の仕方や理解度の相談・支援)			0.177***	0.132***	0.121***	0.127***	0.104**
		就職支援(就職活動の相談・支援)			0.160***	0.164***	0.145***	0.163***	0.154***
	学生生活熱心に取組んだ	生活についての相談							
		部活やサークル、学校の行事							
		友達との交流				0.129***	0.119***	0.150***	0.121***
		授業外での教員との交流				0.076**	0.075*		
		アルバイト							
		就職活動							-0.055*
アウト	卒業時の到達度	授業外学習時間							
		学業成績							
		卒業直後の就業形態							
		初職の専攻(学習)分野との関連性					0.128***	0.121***	0.094***
アウトカム	現在のキャリア	現在の就業形態							
		現在働いている企業の従業員数							
		仕事の専攻(学習)分野との関連性							
		現在の年収							
		昇給や昇格についての評価							
		賃金水準の評価							
	専門学校教育の有用性	責任の重さの評価							
		就職先を見つける上で							0.121**
		仕事に必要な基礎を身につける上で							
		仕事で一人前になる上で							
		将来のキャリアを展望する上で							0.139***
		仕事に必要な学習を続けていく上で							0.119***
		人格を形成していく上で							
補正済みR ²			0.031	0.393	0.442	0.467	0.474	0.453	0.494
推計値(実測値:3.911)			3.905	3.910	3.910	3.907	3.921	3.934	3.940
*p < 0.05 **p < 0.01 ***p < 0.001									
・性別、1:男、0:女(ダミー)									
・卒業後経過年数(入学年の違いを示すための変数) 卒業後1年目:1、5年目:5、9年目:9									
・B専門学校、C専門学校(ダミー)									
・本校が第一志望、1:第一志望、0:その他(ダミー)									
・教育充実度、5:充実していた~1:充実していなかった(5段階)									
・学生生活熱心に取組んだ 5:熱心に取組んだ~1:熱心に取組まなかった(5段階)									
・卒業時の到達度、学業成績、5:上から1:下(5段階)									
・卒業時の到達度、初職の専攻(学習)分野との関連性 1:関連分野、0:その他(ダミー)									
・就業形態、1:正規雇用、0:その他									
・現在のキャリア、現在の年収、9:1000万以上~1:100万未満、0:不明(10段階)									
・現在のキャリア、専攻(学習)分野との関連性 1:関連分野、0:その他(ダミー)									
・現在のキャリア、現在働いている企業の従業員数、7:1000名以上~1:5名以下、0:不明(8段階)									
・現在のキャリア、昇給や昇格、賃金水準、責任の重さ、5:評価されている~1:評価されていない、0:分からない(6段階)									
・専門学校教育の有用性、5:とても重要である~1:全く重要でなかった(5段階)									

データ内訳	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	合計
A 専門学校		89		76		100		68		111		76	520
B 専門学校	49		17		66		33		71		22		258
C 専門学校				84				85				62	231
合計	138		17	160	166		33	153	182		22	138	1009

表中の数値は、重回帰分析の標準偏回帰係数である。これまでの分析同様変数の選択には、変数増減法を用いた。また、表の最下行に各ステップで得られた標準偏回帰係数によって求めた「満足度」の推計値（予測値）を示した。この分析の対象データである3校全データ（1009名）の「満足度」の平均値は3.911であり、実測値として（ ）内に示した。

ステップ毎に分析結果を整理する。

①ステップ

入学した学校が第一志望であったのかが、最も大きな規定因子となっている。この因子は、全てのステップで優位な水準となっており、入学時第一志望であったのかが、その後の学校に対する満足度に影響していることが分かる。卒業後経過年数がマイナスの値となっており、卒業後の年数が経過すると満足度が低下する傾向を示している。また、C専門学校がマイナスの値となっており、他の2校より満足度の点で劣っていることを示している。

このステップでの補正済み R^2 は0.031で、入学時点の有意な3つの変数で満足度の3.1%を説明していることを示している。また、推計値は3.905で、実測値3.911とほぼ近い値となっている。これは、得られた標準偏回帰係数が何れも小数点以下の小さな値であるため回帰式の定数項が3.871となり、既に実測値に近い値になっているためである。

②ステップ

プロセスとして、教育充実度の各種説明変数を加えた。「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」から「卒業論文、卒業制作、卒業発表など」の教育課程上の変数による分析を行った。多くの変数が有意水準となっている。なかでも「専門の授業（講義や実習）」は、0.343と最も大きな値を示している。専門学校教育の中心をなす変数であることが定量的に裏付けられた。

B専門学校が小さな値ではあるがプラスの値を示しており、教育課程上の各種変数を加えた分析では、B専門学校が他の2校と比較して「満足度」の点では優れていることを示している。この優位性はこの後の全てのステップに共通している。

補正済み R^2 の値は、①ステップの0.031から0.393と急激に上昇し「満足度」の39.3%を説明していることを示している。

③ステップ

「図書室、実習機器、実験機器などの施設設備」から「生活についての相談」など、教育課程以外の変数を含めて分析を行った。「学習支援」や「就職支援」の変数が有意となり、補正済み R^2 の値も0.393から0.442と約5%説明力も上昇している。

④ステップ

③ステップに個々の学生が在学期間中に熱心に取り組んだ項目を追加した分析である。

「満足度」を規定する因子としては、「友人との交流」「授業外での教員との交流」が有意な水準となった。説明力は 2.5% 上昇した。

⑤ステップ

卒業時点の「アウトプット」として、「初職の専攻（学習）分野との関連性」が有意な変数となっている。これ以降のステップでも共通した結果である。専門学校教育の第一義的な目的である「在学期間中の学習内容を活かした就職」を裏付ける結果である。④ステップにこの規定因子が 1 つ加わって、説明力は 0.7% 上昇した。

⑥ステップ

現在のキャリアに関する各種の変数を追加して分析を行った。大変興味深いことは、「現在の就業形態」「現在の年収」や「昇給や昇格についての評価」など、卒業生が日々直面している現在の状況は、1 つも出身校に対する「満足度」の規定因子になっていない点である。現在の年収や職場における評価などの良し悪しと、自身の出身校に対する満足度とは特に関連しないことを示している。例えば、「満足度」の規定因子として、年収が高ければ正の値を逆に低ければ負の値を示すことが単純に予想されるが、結果はそうではないというものである。

⑦ステップ

専門学校教育の有用性を加えた分析では、「仕事に必要な基礎を身につける上で」「仕事に必要な学習を続けていく上で」「人格を形成していく上で」が有意な規定因子となり、そうした有用性（学習成果）が満足度に影響している。

また、在学期間中熱心に取り組んだ項目のなかで「就職活動」が、マイナスの値となっている。就職活動を熱心に取り組まなければならないとは、なかなか内定が得られないということであり、満足度としては負の因子となるのであろう。

有用性を含めた最終の分析で、11 の規定因子が得られた。補正済み R^2 は、0.494 となり、11 の規定因子で約 50% 満足度を説明していることになる。推計値は 3.940 となっており、実測値 3.911 より 0.029 高い値になっている。これは、3 校の満足度の実測値は過小評価されているか、または 3 校の評価を下げる未知の規定因子がまだ存在するかのどちらかである。

7章 A 専門学校の教育改善に向けて

ここまで、工業（情報・グラフィックデザイン・コンテンツ）分野の 3 校が 2015 年に取り組んだ卒業生調査の結果を網羅的に示してきた。これは、IR の一環として卒業生調査を行い、学校改善を図る場合に、それぞれの専門学校のどこに課題（問題点）があり、何を改善すべきなのかを明確にするためである。いわば、卒業生調査による学校の健康診断的な意味合いである。特に本稿では、卒業後の初期キャリアを把握し、そこでの課題を解決するためには在学中の教育プロセスの何を改善すべきかの関係

性を見出すことに主眼をおいた。

本稿の IR の主体である A 専門学校は他の 2 校と比較して、就業状況や職場における処遇、教育の充実度や有用性など多くの点で優れていることが確認できた。しかし、多くの課題も顕在化した。最後にまとめとして、A 専門学校の課題とその改善策について示す。

7. 1 A 専門学校の課題（問題点）

3.「現在の就業状況」から 6.「初期キャリアと教育プロセスとの関係」までを通して、A 専門学校の課題（問題点）を「教育課程の課題」「教育課程以外の課題」「卒業後の課題」「3 専門学校に共通した課題」に分けて示す。

（1）教育課程の課題

- ①仕事に必要な能力の必要性（表 3 - 1）の項目で、8.「優先順位を付けて仕事の段取りをする能力」9.「時間を管理する技能」など基礎的・社会的な技能の項目が上位を占めているが、そうした能力を養うような教育課程の編成を学校の方針として意図的に行ってはいない。
- ②「知識を広げ教養を身につける授業」は、教育充実度と満足度・有用性との関係（表 6 - 3）より、満足度・有用性の多くの項目の規定因子となっている。また、在学中に提供した教育に関する充実度（表 4 - 1）より、充実度の順位 2 位と、3 校のなかでも最も高く評価されているが、教養を身につける授業を含んだ教育課程の編成を学校の方針として行ってはいない。
- ③「仕事現場や地域での実習や職場体験」は、教育充実度と満足度・有用性との関係（表 6 - 3）より、有用性の多くの項目の規定因子となっているが、現在は希望する学生が任意に行っており、学校の方針として組織的に行っていない。また、教育の充実度（表 4 - 1）の順位も 9 位と低い。
- ④「資格取得に関わる準備・指導」は、教育充実度と満足度・有用性との関係（表 6 - 3）より、有用性の多くの項目の規定因子となっているが、熱心に取り組んでいる学科とそうでない学科が存在し、学校の方針として全学科共通に組織的に取り組んでいない。また、教育の充実度（表 4 - 1）の順位も 7 位と低い。

（2）教育課程以外の課題

- ①教育充実度と満足度・有用性との関係（表 6 - 3）より、有用性の多くの項目の規定因子となっている「授業以外での学習時間」の確保について、学生に対する特別な対応はなされていない。
- ②教育充実度と満足度・有用性との関係（表 6 - 3）より、満足度・有用性の全て

の項目の規定因子となっている「学習支援（学習の仕方や理解についての相談・支援）」について、学習支援は主にクラス担任に任されており、学校として組織的に取組まれていない。

③在学中熱心に取り組んだことと満足度・有用性との関係（表 6 - 6）より、満足度・有用性の多くの項目の規定因子となっている「授業外での教員との交流」について、現在は個々の教員に任されており、学校の方針として組織的に取り組んでいない。

④総合的に振返った本校に対する満足度ステップ別重回帰分析（表 6 - 7）より、入学時の「本校が第一志望」が満足度の規定因子となっている。入学時に本人が将来目指す職種と入学学科との整合性は、入学生自身の判断に任されており、全入学生を対象に確認するなどには特に行っていない。

（３）卒業後の課題

①仕事に必要な能力の必要性・獲得状況の経年変化（図 3 - 13～図 3 - 20）で、「専攻分野に直接関わる知識・技能」および「時間を管理する技能」は、必要性が「とても必要」の割合の増加に反して、獲得状況「十分身につけている」人の割合は増加していない。むしろ卒業後 1 年目より 9 年目の方が減少している。これらより、卒業後の仕事に必要な各種能力の獲得は順調とはいえない。

②現在の就業状況、仕事に必要な能力の獲得状況、提供した教育の充実度など、多くの点で 3 校のなかで最も優れているが、総合的に振返った自校に対する満足度（表 5 - 2）は、B 専門学校と比較して低い。

③A 専門学校の「総合的に振返った自校に対する満足度（とても満足）」の経年変化（図 5 - 2）は、卒業後 1 年目が最も高く、その後 10 ポイント以上減少している。

④専門学校教育の有用性（表 5 - 1）や教育充実度と満足度・有用性との関係（表 6 - 3）より、「人格を形成していく上で」の評価が B・C 専門学校より劣っている。

（４）３専門学校に共通した課題

①専門学校教育の有用性に関する経年変化（表 5 - 3）で、教育の有用性は経年で減少していく傾向を示している。

②専門学校教育の有用性（表 5 - 1）より、6. 「人間性（人格）を形成する上で」の評価が低い。

7. 2 A 専門学校の教育改善に向けて

今回の卒業生調査により、A 専門学校では多くの課題が見出された。A 専門学校の教育課程の課題、教育課程以外の課題、卒業後の課題、3 専門学校共通の課題に分けて、改善の方向性を示す。

(1) 教育課程の課題の改善の方向性

これまで、A 専門学校では「実践的な専門職者の育成」という方針のもと、それぞれの学科が独自に教育課程の編成を行ってきた。特に昨今は、職業実践専門課程の主旨に沿って、企業と連携した教育課程の編成に重点を置いてきた。

今回の卒業生調査の結果から、「汎用的・社会的な技能」「知識を広げ教養を身につける授業」「資格取得に関わる指導・準備」「仕事現場や地域での実習や職場体験」の重要性が顕在化した。こうした点を踏まえた教育改善の方向性として、学校として教育課程方針（カリキュラムポリシー）を刷新し、全学科に共通する教育内容を加えた教育課程の再編成を図るといった対策が考えられる。

具体的には、有用性の多くの項目の規定因子となっている「仕事現場や地域での実習や職場体験」の実施を、学生の希望に任せるのではなく、各学科の教育課程に位置付け、機会の提供と実施の奨励を図る。仕事に求められる能力の内、必要性が高かった「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」や「時間を管理する技能」などといった「汎用的・社会的な技能」は、職場体験を含む実習の学習内容の項目として示し、修了時にルーブリックなどを用いて、学習成果を評価するといった取組みを行う。

「知識を広げ教養を身につける授業」では、大学の教養課程のような人文科学・社会科学や外国語などの科目を設定するのではなく、就職対策の一環として国語・数学や一般常識、作文（論文）指導などの内容を、全学科共通にある一定の割合を上限に教育課程に含める。

資格取得指導についても、比較的熱心に取り組んでいる I T・情報分野は現状の継続であるが、デザイン・コンテンツ分野においても、社会人として共通に必要な資格等を含め各学科で目標する資格を 2～3 設定し、卒業までの取得指導を徹底する。

以上のような点について、学校の方針として学科横断的に教育課程の編成を図るといった対策である。

(2) 教育課程以外の課題の改善の方向性

教育課程以外の課題である「授業以外での学習時間」や「授業外での教員との交流」の促進について、それを支援する環境や体制の整備が考えられる。

昨今、大学などの高等教育機関では、学習環境の充実や能動的学習（アクティブラーニング）導入の象徴として、従来の図書館をラーニング・コモンズへとリニューアルするといった例が散見される。専門学校はそうした施設について大学とは根本的に

異なる面もあるが、A専門学校においても学内の環境を再点検し、授業外学習や教員・友人との交流を促進する施設・設備や体制の整備などの改善を図る。また、そうした環境面ばかりでなく、各学科の教育課程と連動して、学生の主体的学びを誘発させるような構造的な教育システムの構築が必要である。

「学習支援（学習の仕方や理解についての相談・支援）」の充実については、専門部署の設置や各科目担当教員との面談時間（オフィスアワー）の設定などに、学校として組織的に取り組む。

また、入学時の学科選択が後々まで影響することから、入学当初に行っているクラス担任と学生との面談時に入学学科と卒業後の職種との整合性を確認し、クラス担任から学科への報告を義務付ける。

各教員に一任されている学生指導時の振舞いについても「建学の精神」を源とする教員のあるべき姿（行動指針）といったものを導き出し、日々の教育活動に活かす。以上のような対策が考えられる。

（３）卒業後の課題の改善の方向性と３専門学校に共通した課題について

卒業後の課題として、「総合的に振返った自校に対する満足度」が低い点については、総合的に振返った評価であるため、学校の総合的な取り組みによって評価が上がるものである。対策を講じる端緒としては、表 6 - 7「総合的に振返った本校に対する満足度ステップ別重回帰分析」が参考にできる。

入学時に「第一志望であったか」が、この満足度の規定因子になっていることから、先にも示したが、入学学科と希望職種との整合性をしっかり確認するべきである。

在学期間中の教育プロセスでは、従来通りではあるが「専門の科目（講義や実習）」の充実を図ることが重要である。これには「学生・教員による授業評価」等による改善はもとより、教員の研修や教育課程編成委員会・学校関係者評価による評価・改善など、これまで以上にしっかりとしたPDCAサイクルの構築が必要である。

また、「学習支援（学習の仕方や理解度の相談）」「就職支援（就職活動の相談・支援）」の更なる充実があげられる。就職支援については専門の部署は既に設定されているが、学習支援についてはこれまで専門の部署はなく、クラス担任に一任されていた。学習相談を専門とする部署の設定などを視野に入れた検討が必要である。先にも示したが、学内環境を教員・友人との交流促進といった観点で、再点検・整備を図ることも重要である。

卒業後の専門学校教育への有用性では、「仕事に必要な基礎を身につける」「仕事に必要な学習を続けていく」が満足度の規定因子となっているため、その在学中の取り組みとしては、表 6 - 3「3校 教育の充実度と満足度・有用性」が参考になる。2つの有用性共に「専門の授業」「知識を広げ教養を身につける授業」「卒業論文・卒業制作・

卒業発表」が教育課程上の規定因子となっているため、その充実が考えられる。

「仕事に必要な学習を続けていく」能力の向上は、(3)①の「卒業後の仕事に必要な各種能力の獲得状況が順調でない」点についての在学期間中の対策にもなる。

卒業後の能力獲得に対しては、卒業生を含め広く社会人・女性の学び直しと合わせて、付帯事業として短期講座を開催するといった対策も考えられる。

そうした対策を講じても残る課題として、3つの専門学校に共通する次の2つがあげられる。

- ・ 専門学校教育の有用性の経年低下
- ・ 人格形成に対する低い評価

1つ目の「専門学校教育の有用性の経年低下」は、先にも示したが短期大学にも見られる、職業教育を主とする短期高等教育機関に共通した傾向である。この点は、主に学術研究を主とする四年制大学と大きく異なる。四年制大学では、卒業後の経過年数が増すにつれて有用性も増していく傾向を示しており、この4年制大学の有用性が増加していく傾向を、吉本（2004）は「教育効果の遅効性」と示している。これは、四年制大学卒業生とその他の短期高等教育機関卒業生との産業界における雇用の在り方の違いに起因するとの指摘もあり、学校側だけの対策では解決できない課題でもあるようだ。

2つ目の「人格形成に対する低い評価」についても、短期大学にも同様の傾向が見られ、これも四年制大学以外の高等教育機関共通の課題である。専門学校では、短期大学以上にその傾向は強く表れている。稲永（2005）等の報告によると、四年制大学では「人格の発達」に関する効用は高く評価されており、専門学校では最も高い評価の「就職先」に関する効用は、むしろ下位の評価となっている。

本稿でも何度か示した「学習した内容を活かした就職」は、分かり易い専門学校の目的である。しかし、そうした短期的な目先の目的から少し視野を広げて、長期的な展望に立った、高等教育機関として相応しい目的である人格陶冶に傾注することが、今後の専門学校の大きな課題であろう。

謝辞

2015年度専修学校研究奨励事業として、機会を与えて下さいました一般財団法人職業教育・キャリア教育財団研究研修事業中央委員会委員長・第一平田学園平田眞一理事長および財団の関係者に深く感謝申し上げます。

今回の卒業生調査を行うにあたり、ご賛同頂いたB専門学校、C専門学校の校長先生に深く感謝申し上げます。卒業生調査を3校が連携して行ったことにより、評価の

判断基準（目安となる指標）ができ、同分野専門学校の類似性や特色（独自性）が明確になった。今後も、3校連携による相互評価（ピアレビュー）やデータ分析方法の研修など、教育改善の活動を更に推し進めて行くことをお願いしたい。

卒業生調査を行うにあたり、2012年「高等教育と学位資格研究会」卒業生調査の調査枠組みと調査項目を活用することをご承認頂いたEQ研代表九州大学吉本圭一教授に深く感謝申し上げます。

データの統計的処理や多変量解析について、ご多忙のなかご指導頂いた北海道大学の亀野淳准教授に深く感謝御礼申し上げます。

論文をまとめるにあたり、論文の構成や記述方法・内容などについて大変ご多忙のなかご指導頂いた桜美林大学館昭教授、記述内容とデータとの整合性について、ご指摘頂いた独立行政法人大学評価・学位授与機構渡部廉弘様に深く感謝申し上げます。

卒業生調査の対象者の設定や案内文の作成および発送作業、Web調査システムの構築、データの集計、論文の校正など、多岐にわたり作業を担当して頂いたA専門学校の教職員の方々など、ご尽力頂いた全ての方に深く感謝御礼申し上げます。

引用・参考文献

稲永由紀 2005「大卒初期キャリア研究における日英比較の有効性 欧州大陸系諸国との比較から」独立行政法人労働政策研究・研修機構『労働政策研究報告書 No. 38』
23 頁

生涯学習政策局 2013『専修学校における学校評価ガイドライン』文部科学省
14 - 15 頁

実践的な職業教育を行う新たな教育機関の制度化に関する有識者会議 2015『実践的な職業教育を行う高等教育機関の在り方について 審議のまとめ』文部科学省 15 頁

独立行政法人 情報処理推進機構 IT 人材育成本部編 2015『IT 人材白書 2015』
34 - 35 頁

吉本圭一 2004「高等教育と人材育成－「30歳社会的成人」と「大学教育の遅効性」－」、高等教育研究所紀要『高等教育研究紀要』第19集、245 - 261 頁

吉本圭一 2007「卒業生を通した「教育の成果」の点検・評価方法の研究」独立行政法人大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第5号 99 頁

吉本圭一 2010「短大教育における総合評価」短期大学の将来構想に関する研究会『短期大学卒業生のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』第二部 卒業生調査の分析 第10章 163 - 174 頁

吉本圭一 2015「職業統合的学習と学習成果 短期大学・専門学校卒業生調査より」短期大学コンソーシアム九州紀要 Vol.5 別冊 11 頁

研 究 紀 要 —平成27年度—

平成28年 3 月31日 発行

編集・発行 一般財団法人 職業教育・キャリア教育財団
〒102—0073 東京都千代田区九段北 4 - 2 -25
私学会館別館11階

印 刷 情報印刷株式会社
〒102—0072 東京都千代田区飯田橋 4 - 2 - 2
